青森市埋蔵文化財発掘調査報告書　第28集

三内丸山(2)遺跡

発掘調査報告書

平成7年度

青　森　市　教　育　委　員　会

序

平成4年度から県で発掘調査を実施してきている三内丸山(2)遺跡は、従来の縄文時代･縄文遺跡というもののイメージを大きく考え直させられるほど貴重なものが数多く出て来た全国でも最大級の縄文集落遺跡です。今や多くの報道によって県内はもとより、日本全国に青森市にあります三内丸山という遺跡が知れ渡るようになりました。、平成7年度に入りますとかつてない縄文ブームが沸き起こり、三内丸山(2)遺跡の公開が始まってから訪れる見学者の数は30万人を越え、三内丸山フィーバーを引き起こしております。

このようななか、三内丸山(2)遺跡に都市計画街路の敷設事業が計画され、予定路線が遺跡地内を通ることとなりましたことから、当委員会では、埋蔵文化財の取り扱いについて事業者側と協議を重ねてまいりました結果、事前に発掘調査を実施し遺跡の記録保存を図ることとし、平成4年度から3か年にわたり発掘調査を実施いたしました。

本書は、その3年次目にあたる三内丸山(2)遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

本書が研究者はもとより市民各位にとりましても当市の歴史を紐解く鍵として、さらには文化財保護啓蒙にいささかでも役立つことができれば、幸甚の至りと存じます。

最後となりましたが、ここに本書を刊行することができましたことは、調査指導員・調査員はじめ関係各機関・各位のご指導、さらには事業者である青森市都市開発部のご理解と三内地区各町会各位のご協力の賜ものによるものと、ここに深く感謝の意を表する次第であります。

平成8年3月

青森市教育委員会

教育長　池　田　　敬

例　　言

1. 本書は、平成6年度に発掘調査を実施した青森市大字三内字丸山に所在する「三内丸山（2）遺跡」、5年度に刊行した「三内丸山（2）・小三内遺跡発掘調査報告書」において便宜上地区割りしたC区に相当する区域の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、青森市都市計画街路事業（3・4・15号里見丸山線）に先立って実施されたものである。
3. 発掘調査を実施した「三内丸山（2）遺跡」は、青森県遺跡台帳に遺跡番号01021番として登録されている周知の遺跡である。
4. 遺構の取り扱いについては、土壙墓と思われる遺構が検出され、県の三内丸山（2）遺跡保存ということに鑑み、事業委託者側との協議により、3基の遺構については遺構確認にとどめ、精査した遺構についてはすべてに砂を入れ遺構の保存を図っている。
5. 本書に掲載してある図版の縮尺は、各図版ごとに表示してあるが、ないものは任意の縮尺である。なお写真図版については、縮尺の統一を図っていない。
6. 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森市教育委員会で保管している。
7. 資料の鑑定は、次の方に依頼した。

   石器の石質鑑定　　青森県立弘前高等学校教諭　　工藤　一彌
8. 発掘調査並びに報告書作成にあたり、次の機関・諸氏にご指導を賜った。ここに深く感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

   青森県教育庁文化課・青森県教育庁三内丸山遺跡対策室・青森県埋蔵文化財調査センター・青森県立郷土館・地元各町会

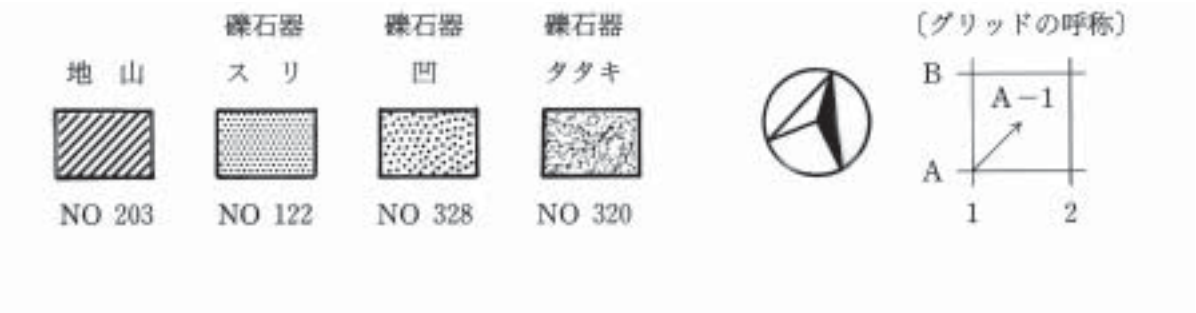
   阿部　美杉・市川　金丸・内海　剛・上野　茂樹・岡田　康博・小笠原　雅行・木村　真明・工藤　直樹・白鳥　文雄・関根　輝雄・関谷　学・中村　哲也・長崎　勝巳・長瀬　昇・成田　滋彦・秦　光次郎・畠山　昇・古屋敷　則雄・松橋　智佳子・三浦　圭介・三浦　孝仁・三宅　徹也

凡　　例

1. 本文中及び図版・表に使用した略称・記号・スクリーントン等の表示内容は、次のとおりである。

H……竪穴住居跡　土・15……土壙　円……円形周溝　埋……埋設土器遺構
焼……焼土状遺構　溝……溝状遺構　溝P……溝状ピット　盛……盛土状遺構
配……配石遺構　小……小ピット群　P……土器　S……石器

スクリーントーンの表示は、次のとおりである。



目　　次

序
例言
目次

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項……1
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　調査要項……1
　第3節　調査方法……2
　第4節　周辺の遺跡……8
　第5節　遺跡の基本層序……10

第Ⅱ章　調査成果の概要……11
　第1節　検出遺構……11
　　1. 土壙……11
　　2. 溝状遺構……18
　　3. 盛土状遺構……18
　　4. 配石遺構……18
　　5. 小ピット群……19
　第2節　出土遺物……24
　　1. 土器……24
　　2. 石器……28
　　3. 土製品……28

第Ⅲ章　分析と考察……32

まとめ……34

写真図版……35

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項

第1節　調査に至る経過

平成3年度、青森市では市内三内地区に都市計画街路事業（3・4・15号里見丸山線）の計画を明らかにした。市都市計画課より計画予定地内に埋蔵文化財包蔵地が含まれているかどうかの照会があった。それに対し、市教育委員会社会教育課では、予定地の大半が周知の埋蔵文化財包蔵地であることを通知するとともに、この遺跡の取り扱いについて事業者側との協議の結果、遺跡の記録保存として発掘調査を実施することとした。調査期間は、平成4・5年度の2年間としたが、一部コンクリート舗装の道路部分（既刊している「三内丸山（2）遺跡発掘調査報告書」青森市埋蔵文化財報告書第23集）については、改めて協議するということになっていたが、平成6年度に入り協議の結果、調査を実施するという結論に至り、三内丸山（2）遺跡の3年次目として発掘調査を実施することとなった。

第2節　調査要項

1．調　査目　的　平成6年度青森市都市計画街路事業（3・4・15号里見丸山線）に先立ち、当該地区に所在する三内丸山（2）遺跡の発掘調査を実施し、その記録保存を図るとともに、地域社会の文化財活用に資する。

2．調　査期　間　平成6年10月11日から平成6年12月8日

3．遺跡名及び所在地　三内丸山（2）遺跡　（さんないまるやま）
青森市大字三内字丸山275－1外

4．調査対象面積　2，200㎡

5．調 査 委 託 者　青森市都市開発部

6．調 査 受 託 者　青森市教育委員会

7．調査担当機関　青森市教育委員会社会教育課

8．調査協力機関　青森県教育庁文化課
青森県埋蔵文化財調査センター
青森県青森土木事務所
財団法人青森県スポーツ振興事業団

9．調　査　体　制

調査指導員　村越　潔　弘前大学教授　（現　青森大学考古学研究所所長兼教授）
調　査　員　工藤　一彌　青森県立弘前高等学校教諭
調査事務局　青森市教育委員会
教　育　長　池田　敬
生涯学習部長　矢野　順平
社会教育課長　津川　久善
同　課長補佐　遠藤　正夫　（現　埋蔵文化財対策室長）
〃　主幹兼埋蔵文化財係長　塩谷　光男　（現　西部学校給食共同調理場主幹）

〃　主　査　武田　均
〃　指導主事　長沼　圭一　（調査担当）
〃　〃　徳差　義男　（現　青森市立浪打小学校教諭）
〃　〃　小林　淳　（現　八戸市立長者小学校教諭）
〃　主　事　田澤　淳逸
〃　〃　上野　隆博

第３箭　調査方法

1．調査区域の状況

調査区域の範囲は、環状7号バイパス寄りの通称山寅道路から県総合運動公園の西駐車場に至るコンクリート舗装の道路部分とその両側の林地（便宜上の区分でいうとC区）の約2，200㎡である。

平成4年度の三内丸山（2）遺跡の調査開始時、この範囲はコンクリート舗装の道路部分であったため調査対象から外し改めて協議することとしていた。平成6年度になり関係者との協議の結果、当該地も発掘調査を実施することとなった。しかし、県では三内丸山（2）遺跡保存ということに鑑み、事業委託者側とも協議の結果、記録保存も必要最少限にとどめるということで、検出された３基の遺構は遺構確認にとどめ、精査した遺構には砂を入れ保存を図った。

2．グリッドの設定

C区は単独に道路建設工事用の杭が一直線上にある区域を活用し、この延長軸線を基準線としグリッドを設定した。

3．土層の呼称

自然堆積土層については、上位から下位へⅠ・Ⅱ・Ⅲとアラビア数字を、遺構内の覆土については同じく上位から下位へ１・２・３と算用数字を付すこととした。

4．粗掘り

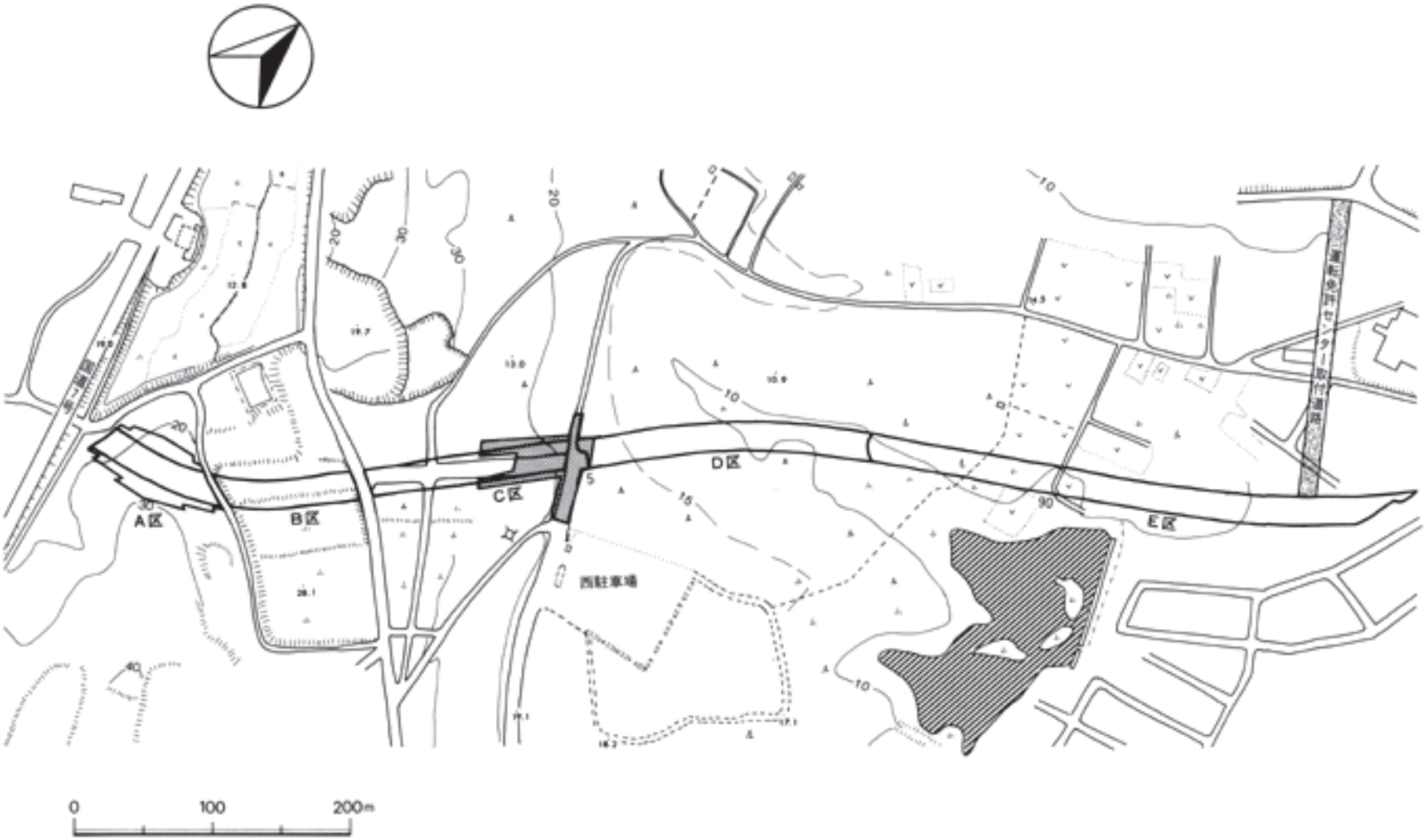
粗掘りは、土層観察用のベルトを残しながら、グリッド単位で作業を進めることにした。粗掘りの深さは、第Ⅰ層（表土）から第Ⅴ層（地山ローム・最終的に無遺物層となる地山）上位付近までとした。

5．遺物の取り上げ方法

出土遺物のうち、遺構内のものについては、原則としてレベル・ポイント・出土層位を記載し、場合によっては微細図を作成し、写真撮影を行い取り上げることにした。遺構外のものについては、グリッド単位に出土層位を記載した。また、取り上げに際しては、色分けしたカード（土器一白、石器一青、その他一赤）を使用した。

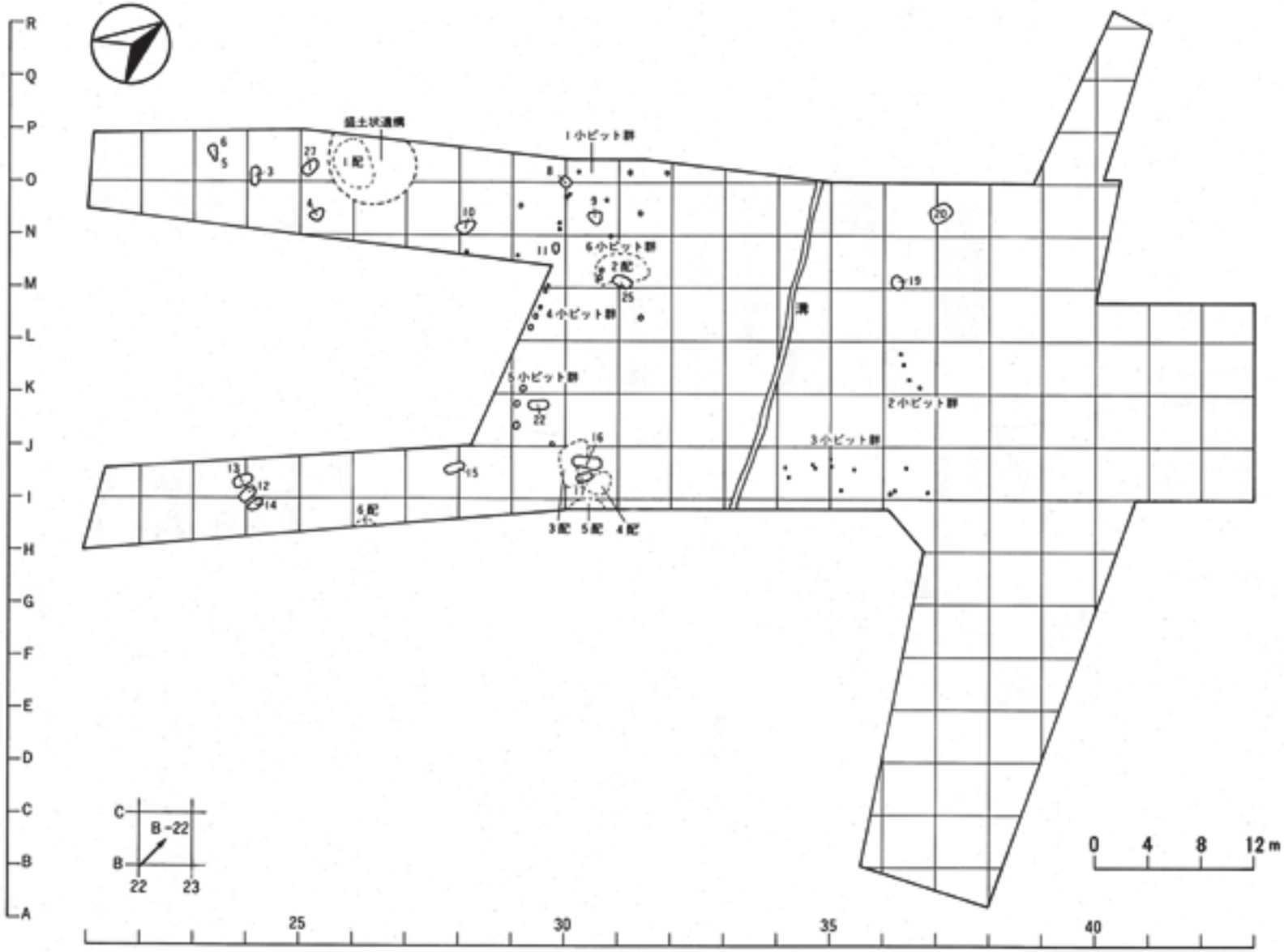
6．遺構の調査

遺構は、調査区ごと各種類ごと確認順に番号を付した。遺構の精査は、原則として二分法ないしは四

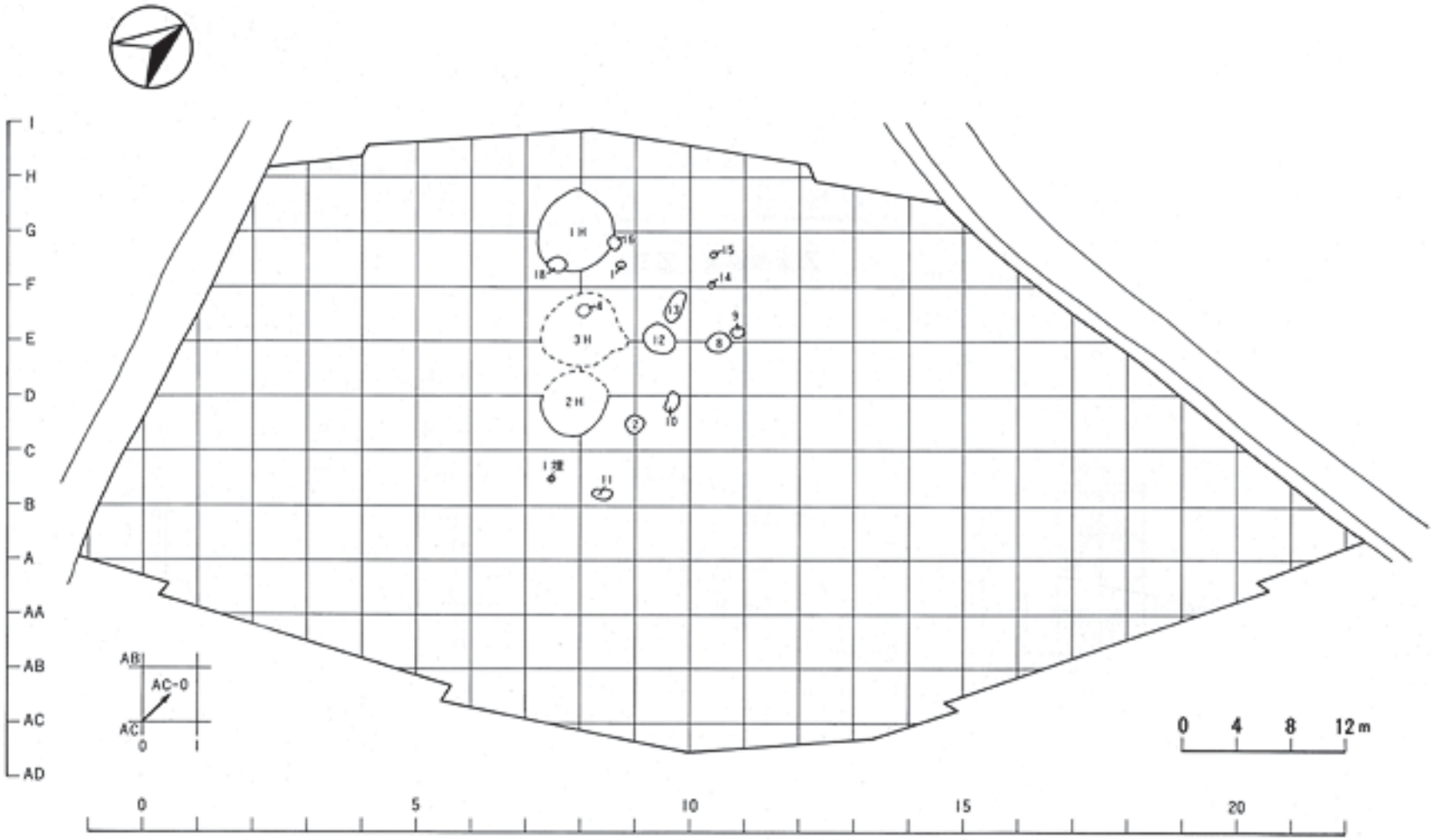


第１図　調査区位置図

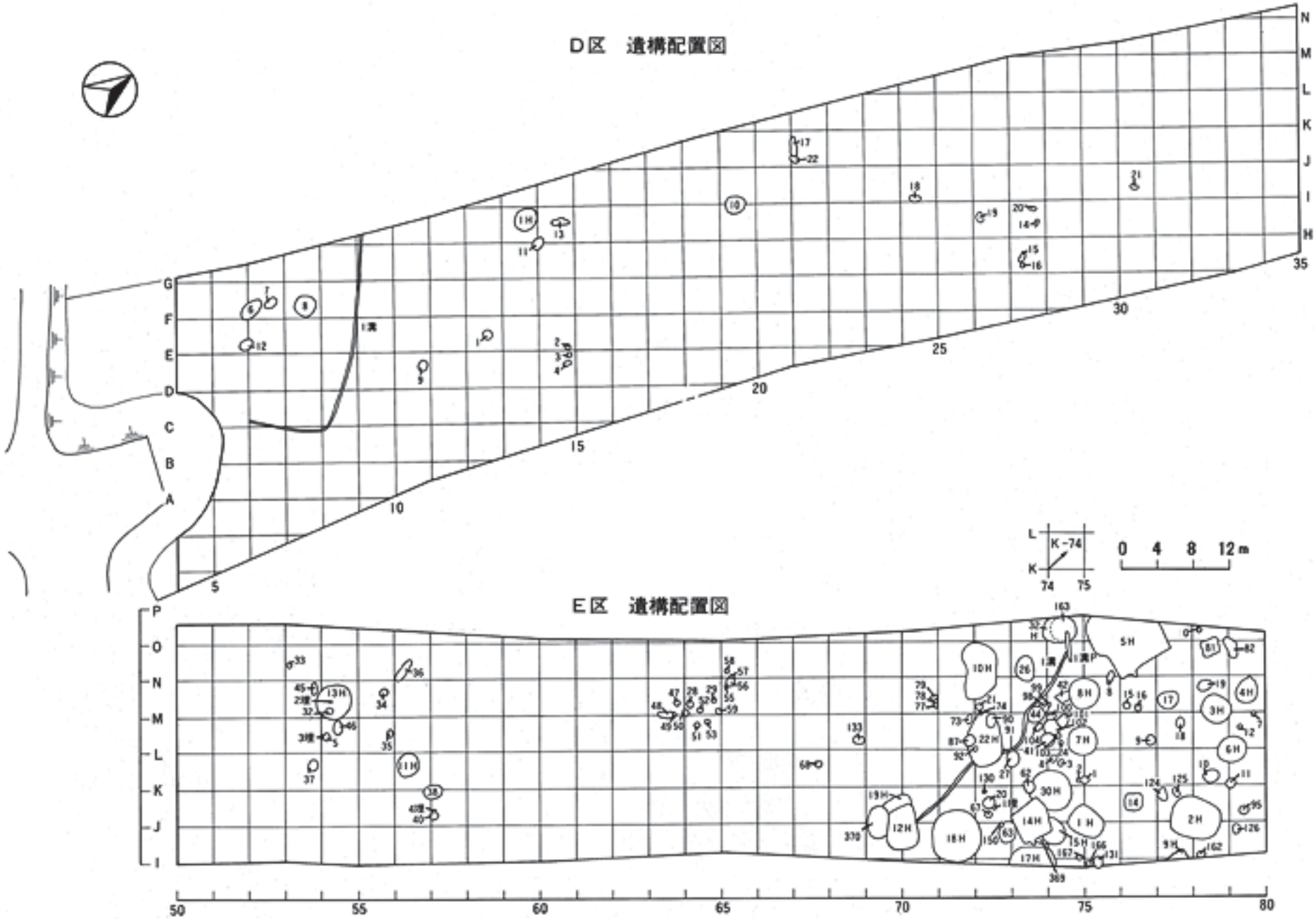
（ A・B・C・D・E区は、平成４年度
発掘調査時の便宜上の地区名 ）


盛土状遺構
1配
1小ピット群
6小ピット群
2配
4小ピット群
5小ピット群
溝
2小ピット群
3小ピット群
6配
3配 5配 4配
B-22
22 23
0 4 8 12m
25 30 35 40
R Q P O N M L K J I H G F E D C B A

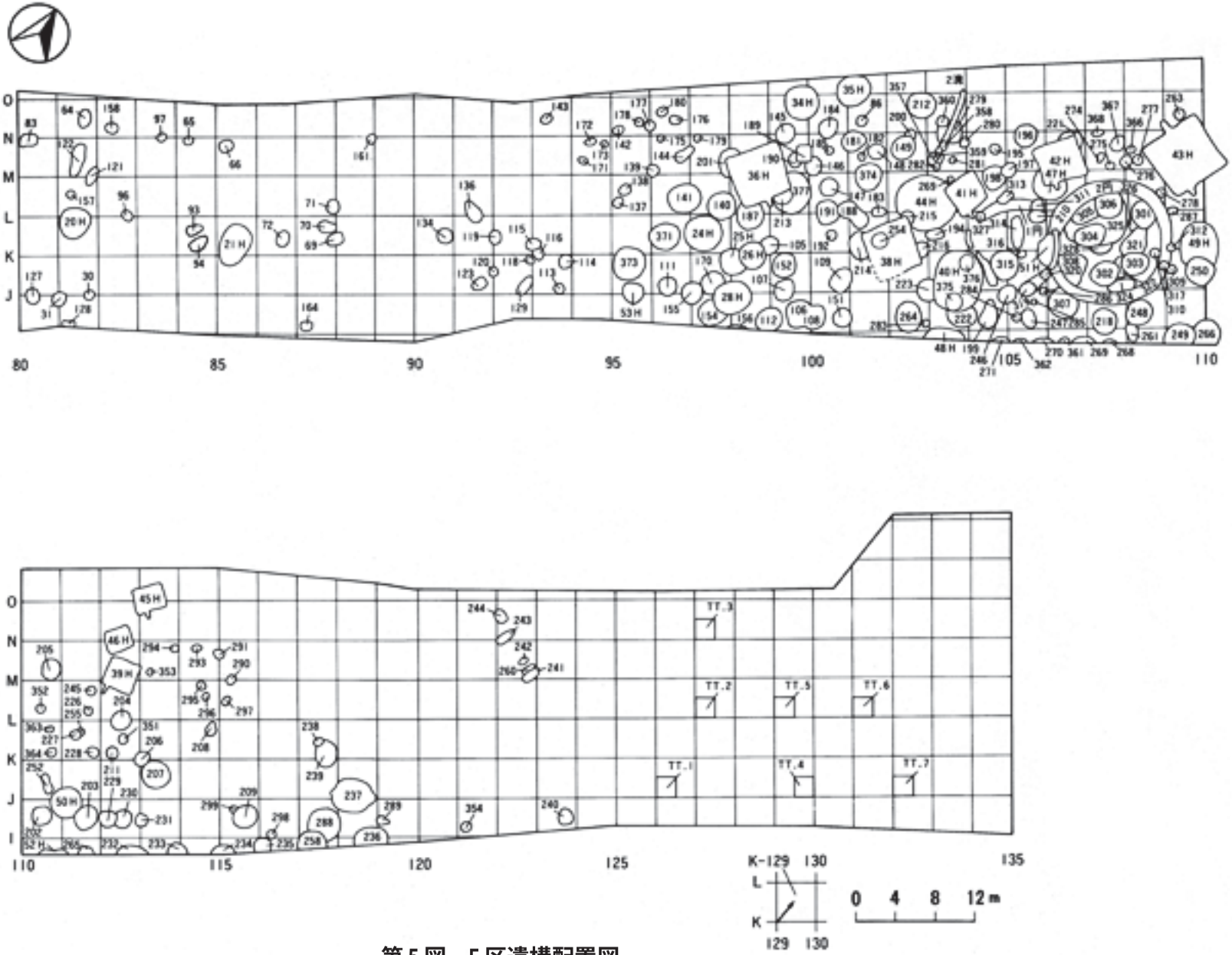
第2図　遺構配置図



第３図　Ａ区遺構配置図



第４図　Ｄ区・Ｅ区遺構配置図


O
N
M
L
K
J
I
80
85
90
95
100
105
110
115
120
125
130
135
K-129 130
L
K
129 130
0 4 8 12 m

第５図　Ｅ区遺構配置図

第６図　周辺の遺跡

周辺の遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	所在地	種　別	時　　代	文　　献	遺跡番号
1	三内丸山（1）	三内字丸山	集落跡	縄（前・中・後）・平安	三内丸山遺跡（Ⅱ）発掘調査報告書	20
2	三内丸山（2）	三内字丸山	集落跡	縄（前・中・後）	近野遺跡発掘調査報告書（Ⅲ） 三内丸山（Ⅲ）遺跡発掘調査報告書 三内丸山（2）遺跡Ⅱ発掘調査報告書 三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書	21
3	三内丸山（3）	三内字丸山	散布地	縄（前・中・後）・平安		248
4	三内丸山（4）	三内字丸山	散布地	縄（前・中・後）・平安		249
5	小三内	三内字丸山	散布地	縄（前・中・後・晩）・平安	小三内遺跡発掘調査報告書	17
6	近野	安田字近野・ 三内字丸山	集落跡	縄（前・中・後・晩）・平安	近野遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ	65
7	三内	三内字丸山	集落跡	縄（前・中・後）・平安	三内遺跡埋蔵文化財調査報告書	19
8	三内沢部（1）	三内字沢部	集落跡	縄（早・前・中・後）・平安	三内沢部遺跡発掘調査報告書	64
9	三内沢部（2）	三内字沢部	散布地	縄（中）		162
10	浪館（1）	三内字丸山	散布地	縄（前）		11
11	浪館（2）	浪館字平岡	散布地	縄（中・晩）		12
12	安田（1）	安田字近野	散布地	縄（前）		15
13	安田（2）	安田字近野・ 細越字栄山	散布地	縄（前・中）		16
14	安田水天宮	安田字近野	散布地	縄（前・中・後）		14
15	細越館	細越字栄山	集落跡	平安	『青森県の中世城館』	66
16	三内霊園	三内字平山	散布地	縄（前・中）	三内霊園遺跡調査概報	18
17	石江	石江字平山	散布地	縄（前）		56
18	江渡	石江字江渡	散布地	縄（前）		163
19	細越	細越字種元	集落跡	縄（晩）・平安	細越遺跡発掘調査報告書	13
20	朝日山（1）	高田字朝日山	集落跡	縄・平安・中世	朝日山遺跡発掘調査報告書 朝日山遺跡Ⅱ発掘調査報告書 朝日山遺跡Ⅲ発掘調査報告書	165
21	朝日山（2）	高田字朝日山	集落跡	縄・平安	朝日山遺跡Ⅲ発掘調査報告書	197
22	朝日山（3）	高田字朝日山	集落跡	縄・平安	朝日山遺跡Ⅳ発掘調査報告書	198
23	朝日山（4）	高田字朝日山	散布地	平安		222
24	朝日山（5）	高田字朝日山	散布地	平安		223
25	高田城	高田字日野	城　館	中世	『青森県の中世城館』	170
26	高田蝦夷館	高田字朝日山	城　館	中世	『青森県の中世城館』	171

（番号は第６図の番号と同一）

分法による平面・分層発掘で行った。

7．実測図の作成

平面図一原則として、簡易遣り方測量によって作成した。縮尺は土壙は20分の1とした。

断面図一標準土層は20分の1の縮尺で、調査区域の主要な地点にセクションベルトを設け、土層断面図を作成した。遺構は、堆積状態と断面図を二方向にわたって作成した。断面図には、各層ごとの土色・しまり具合・粒径・混入物・湿性・粘性の注記・埋没過程・遺物のあり方・遺構の新旧関係・その他の所見を書き込むことにした。

8．写真記録

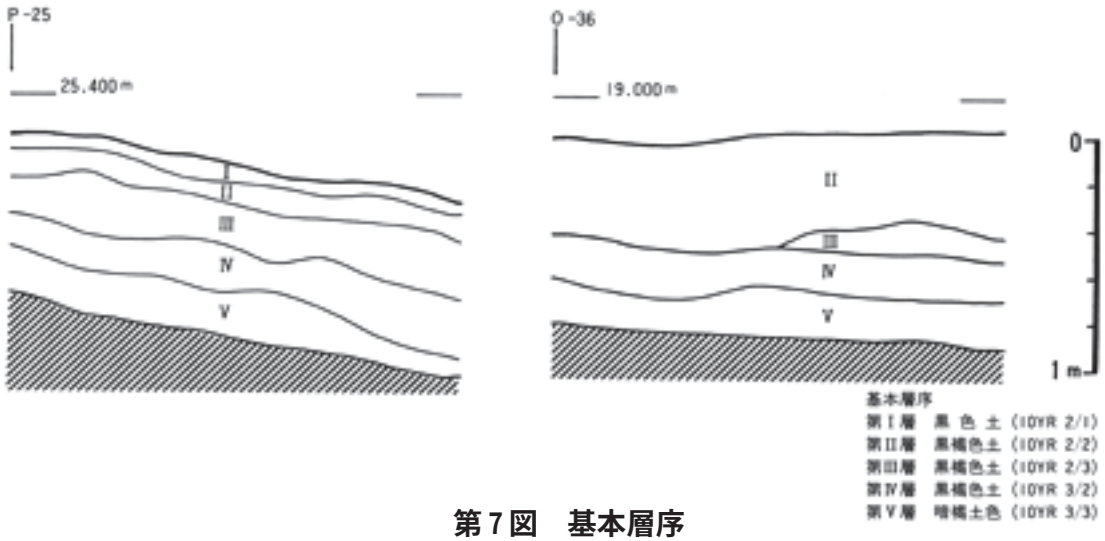
発掘調査に欠かせない作業に写真撮影がある。活字では表現できない後世に如実に伝えられる貴重な資料が写真である。このような観点に立ち、調査中は適宜、遺構・遺物等の写真撮影を行うことに努めた。その際に使用するカメラは2台で、使用するフィルムはモノクロとカラーリバーサルの2種類とした。撮影は、平面プランの確認状況・堆積土層・完掘・遺物出土状況・その他作業風景等を記録した。

第4節　周辺の遺跡

本遺跡は、沖館川とその支流（現在は宅地化）にはさまれた丘陵面の南麓に位置し、同一丘陵上には小三内遺跡・三内丸山（1）遺跡、東側には近野遺跡・浪館（2）遺跡、北東側に浪館（1）遺跡、南側に三内丸山（3）遺跡・三内丸山（4）遺跡、沖館川をはさんで対岸には三内霊園遺跡・三内沢部（1）遺跡・三内沢部（2）遺跡が所在している。

以上のように、本遺跡周辺には多くの遺跡が所在しており、市内でも有数の遺跡の密集地域であり、これまでの発掘調査により多大な調査成果を上げてきている。

第5節　遺跡の基本層序



第7図　基本層序

第Ⅱ章　調査成果の概要

第１節　検出遺構

1．土　　壙　　調査の結果、土壙が19基検出された。(第1・2・7・18・21・23・24・26号については、精査した結果、遺構と認められず欠番とした。)

第3号土壙（第8図）
［位　　置］　N・0－24グリッドに位置する。
［重　　複］　なし。
［平面形・規模］　長軸178㎝、短軸120㎝、深さ40㎝の不整楕円形である。長軸方位はN－66°－Wである。
［壁　・　底　面］底面は凹凸が見られる。
［堆　　積　　土］3層に分層した。全体にローム粒を小量含む。
［出　土　遺　物］覆土から、中期末の土器片が出土した。

第4号土壙（第8図）
［位　　置］　N－25グリッドに位置する。
［重　　複］　なし。
［平面形・規模］　長軸114㎝、短軸80㎝、深さ10㎝の不整楕円形である。長軸方位はN－0°－Sである。
［壁　・　底　面］底面は凹凸が見られる。
［堆　　積　　土］分層できなかった。
［出　土　遺　物］覆土から、縄文前期円筒下層d式の土器片が出土した

第5号土壙（第8図）
［位　　置］　0－23グリッドに位置する。
［重　　複］　6土と重複。6土より新しい。
［平面形・規模］　長軸（90）㎝、短軸60㎝、深さ16㎝の不整楕円形である。長軸方位はN－77°－Wである。
［壁　・　底　面］底面はほぼ平坦である。
［堆　　積　　土］3層に分層した。1層に1㎝大の焼土ブロック混入。
［出　土　遺　物］なし。

第6号土壙（第8図）
［位　　置］　0－23グリッドに位置する。
［重　　複］　5土と重複。5土より古い。
［平面形・規模］　長軸80㎝、短軸（60）㎝、深さ12㎝の隅丸長方形である。長軸方位はN－15°－Eで

ある。
［壁　・　底　面］底面は凹凸が見られる。
［堆　　積　　土］2 層に分層した。
［出　土　遺　物］なし。

第 8 号土壙（第 8 図）
［位　　置］N・0 － 29・30 グリッドに位置する。
［重　　複］なし。
［平面形・規模］　長軸 106㎝、短軸 100㎝、深さ 16㎝ の不整円形である。
［壁　・　底　面］底面に 1 個ピットが見られる。
［堆　　積　　土］分層できなかった。
［出　土　遺　物］なし。

第 9 号土壙（第 8 図）
［位　　置］N － 30 グリッドに位置する。
［重　　複］なし。
［平面形・規模］　長軸 130㎝、短軸 114㎝、深さ 24㎝ の不整楕円形である。長軸方位は N － 56 ° － E である。
［壁　・　底　面］壁は緩やかに立ち上がる。底面は凹凸が見られる。
［堆　　積　　土］3 層に分層した。
［出　土　遺　物］なし。

第 10 号土壙（第 8 図）
［位　　置］　N － 27・28 グリッドに位置する。
［重　　複］　なし。
［平面形・規模］　長軸 160㎝、短軸 96㎝、深さ 24㎝ の不整楕円形である。長軸方位は N － 10 ° － E である。
［壁　・　底　面］底面は凹凸が見られる。
［堆　　積　　土］分層できなかった。
［出　土　遺　物］覆土から、中期円筒上層 d 式の土器片が出土した。

第 11 号土壙（第 8 図）
［位　　置］　M － 29 グリッドに位置する。
［重　　複］　なし。
［平面形・規模］　長軸 105㎝、短軸 78㎝、深さ 28㎝ の鐸形である。長軸方位は N － 40 ° － W である。
［壁　・　底　面］底面に 1 個ピットが見られる。
［堆　　積　　土］2 層に分層した。
［出　土　遺　物］なし。

第12号土壙（第8図）
［位　　置］ H・I－23・24グリッドに位置する。
［重　　複］ なし。
［平面形・規模］ 長軸140㎝、短軸80㎝、深さ20㎝の楕円形である。長軸方位はN－9°－Eである。
［壁　・　底　面］底面は凹凸が見られる。
［堆　　積　　土］2層に分層した。
［出　土　遺　物］なし。

第13号土壙（第9図）
［位　　置］ I－23・24グリッドに位置する。
［重　　複］ なし。
［平面形・規模］ 長軸188㎝、短軸72㎝、深さ25㎝の隅丸長方形である。長軸方位はN－30°－Eである。
［壁　・　底　面］底面から上端にかけて垂直に立ち上がる。底面は多少凹凸がある。底面全体に溝（深さ8～10㎝）が巡っている。
［堆　　積　　土］4層に分層した。ローム粒や浮石が全体に混入。
［出　土　遺　物］なし。

第14号土壙 ――――― 未精査
［位　　置］ H－24グリッドに位置する。
［重　　複］ なし。

第15号土壙（第9図）
［位　　置］ I－27・28グリッドに位置する。
［重　　複］ なし。
［平面形・規模］ 長軸180㎝、短軸50㎝、深さ10㎝の楕円形である。長軸方位はN－15°－Eである。
［壁　・　底　面］底面は凹凸が見られる。
［堆　　積　　土］1層のみの堆積である。
［出　土　遺　物］なし。

第16号土壙（第9図）
［位　　置］ I－30グリッドに位置する。
［重　　複］ 土壙上部に3号配石遺構あり。
［平面形・規模］ 長軸222㎝、短軸85㎝、深さ42㎝の楕円形である。長軸方位はN－49°－Eである。
［壁　・　底　面］底面から上端にかけて垂直に立ち上がる。底面は平坦である。西南側の下端を除き溝（深さ8～10㎝）が巡っている。
［堆　　積　　土］3層に分層した。
［出　土　遺　物］なし。

第17号土壙　――――　未精査
［位　　置］　Ｉ－30グリッドに位置する。
［重　　複］　土壙上部に3号配石遺構あり。

第19号土壙（第9図）
［位　　置］　L・M－36グリッドに位置する。
［重　　複］　なし。
［平面形・規模］　長軸150㎝、短軸124㎝、深さ16㎝の不整円形である。
［壁　・　底　面］底面は平坦である。
［堆　　積　　土］2層に分層した。
［出　土　遺　物］覆土から、中期円筒上層ａ式の土器片が出土した。

第20号土壙（第9図）
［位　　置］　N－36・37グリッドに位置する。
［重　　複］　なし。
［平面形・規模］　長軸228㎝、短軸150㎝、深さ20㎝の不整楕円形である。長軸方位はN－12°Eである。
［壁　・　底　面］底面は凹凸が見られる。
［堆　　積　　土］2層に分層した。
［出　土　遺　物］覆土から、前期円筒下層ｄ式の土器片が出土した。

第22号土壙（第9図）
［位　　置］　J－29グリッドに位置する。
［重　　複］　なし。
［平面形・規模］　長軸162㎝、短軸66㎝、深さ45㎝の隅丸長方形である。長軸方位はN－35°－Eである。
［壁　・　底　面］底面は平坦である。
［堆　　積　　土］2層に分層した。
［出　土　遺　物］なし。

第25号土壙（第9図）
［位　　置］　M－30・31グリッドに位置する。
［重　　複］　なし。
［平面形・規模］　長軸184㎝、短軸70㎝、深さ45㎝の不整楕円形である。長軸方位はN－57°－Eである。
［壁　・　底　面］底面は多少凹凸である。
［堆　　積　　土］5層に分層した。炭化物やローム粒を全体に含む。
［出　土　遺　物］なし。

第27号土壙　――――　未精査

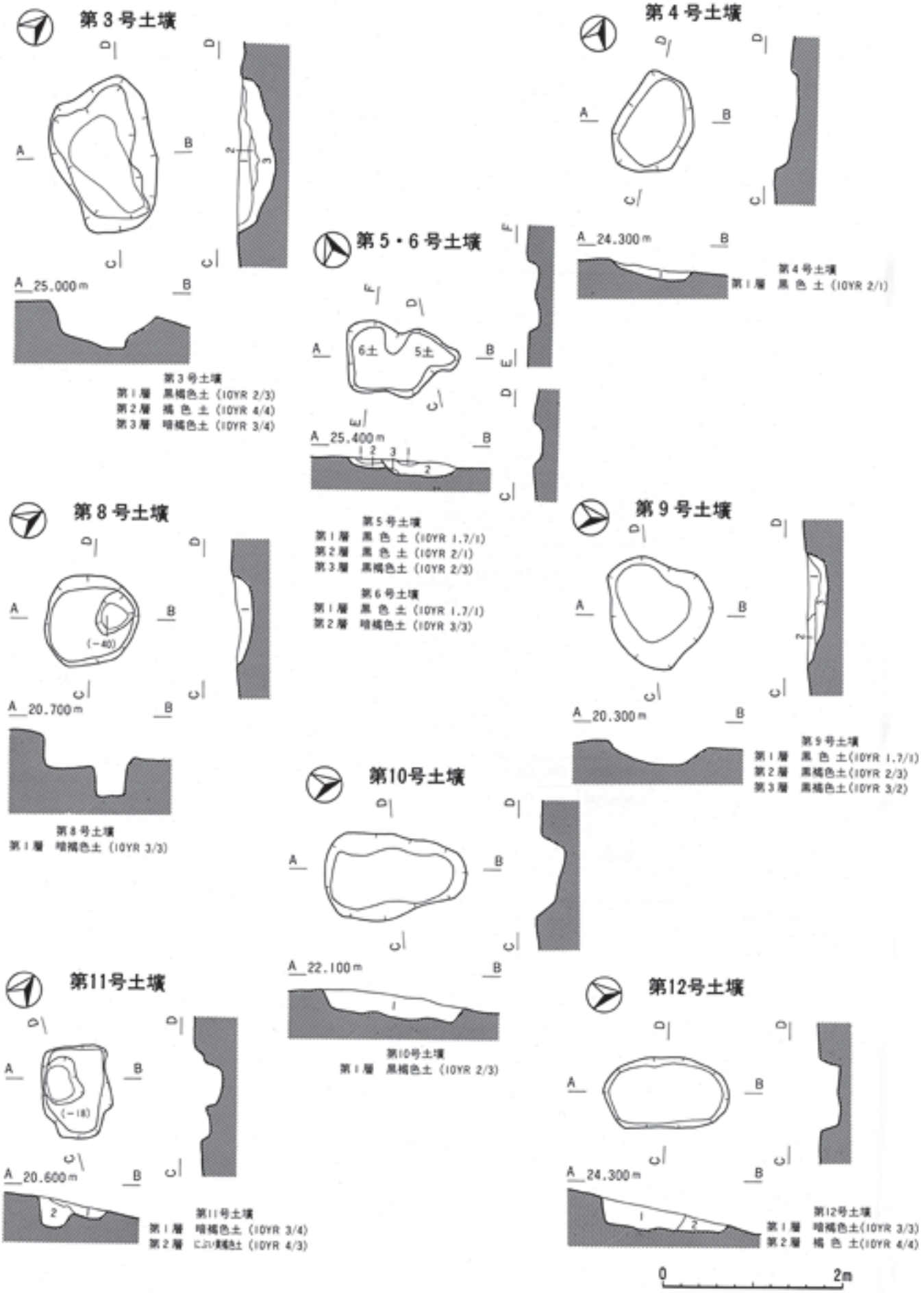
［位　　置］　0－25グリットに位置する。

［重　　複］　　なし。

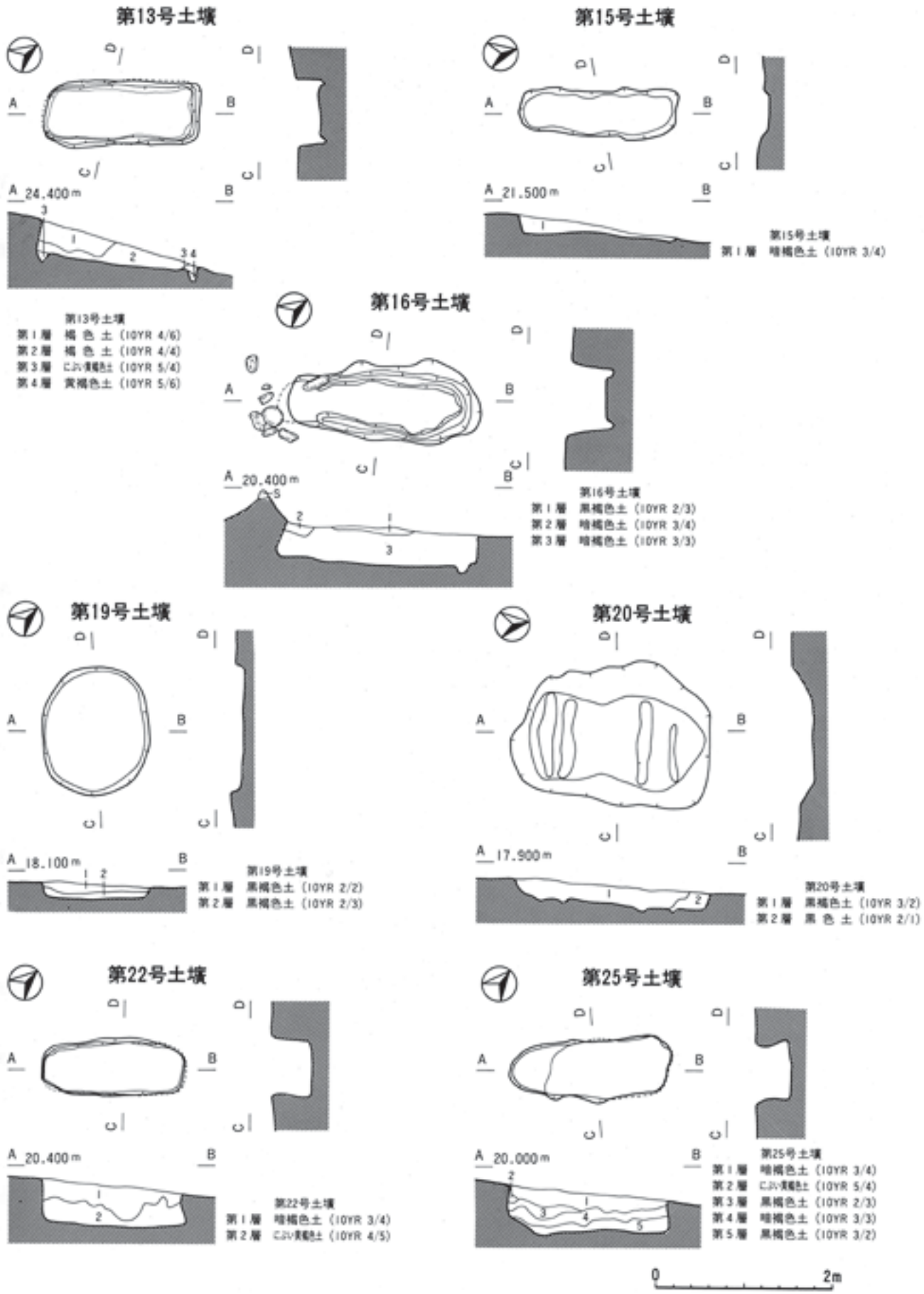
土壙観察表

土壙番号	グリッド	重　複	平面形	計　測　値（cm）			出土遺物			備　　考	長軸方位
				開口部	壙底部	深さ	土器	石器 剥片	石器 礫		
3	N・0－24		不整楕円形	178×120	112×　48	40	○				N－66°－W
4	N－25		不整楕円形	114×　80	100×　62	10	○				N－　0°－S
5	0－23	6土と重複	不整楕円形	(90)×　60	(70)×　40	16				6土より新しい	N－77°－W
6	0－24	5土と重複	隅丸長方形	80×（60）	70×（50）	12				5土より古い	N－15°－E
8	N・0－29・30		不整円形	106×100	92×　80	16				ピット1個	
9	N－30		不整楕円形	130×114	90×　65	24					N－56°－E
10	N－27・28		不整楕円形	160×　96	140×　60	24	○				N－10°－E
11	M－29		鐸形	105×　78	95×　66	28				ピット1個	N－40°－W
12	H・I－23・24		楕円形	140×　80	128×　66	20					N－　9°－E
13	I－23・24		隅丸長方形	188×　72	162×　50	25				底面に溝あり	N－30°－E
14	H－24			－×－	－×－	－				遺構保存（未精査）	
15	I－27・28		楕円形	180×　50	172×　42	10					N－15°－E
16	I－30	3配石	楕円形	222×　85	210×　50	42				配石を伴う、底面に溝あり	N－49°－E
17	I－30	3配石		－×－	－×－	－				遺構保存（未精査）、配石を伴う	
19	L・M－36		不整円形	150×124	136×115	16	○				
20	N－36・37		不整楕円形	228×150	200×　80	20	○			底面に重機の跡あり	N－12°－E
22	J－29		隅丸長方形	162×　66	162×　54	45					N－35°－E
25	M－30・31		不整楕円形	184×　70	180×　65	45					N－57°－E
27	0－25			－×－	－×－	－				遺構保存（未精査）	

※□は土壙墓



第8図　土壙（第3・4・5・6・8・9・10・11・12号）



第9図　土壌（第13・15・16・19・20・22・25号）

2．溝状遺構　　調査の結果、溝状遺構が１本（第10図）検出された。

［位　　置］ H～0－33・34グリッドに位置する。
［重　　複］ なし。
［規　　模］ 幅58～78cm、深さ16～24cmで、25mほどの長さを検出した。主軸方位はN－37°－Wである。
［壁・床面］上端から底面にかけて傾斜している。底面は凹凸が見られる。
［堆積土］2層に分層した。
［出土遺物］覆土から、中期末の土器片が出土した。

3．盛土状遺構　　調査の結果、盛土状遺構が１基（10図）検出された。この盛土状遺構は、第１号配石遺構の下部に位置し、30～40cm程小高く人為的に土を盛り中央部を高くしたマウンドを構築したものである。範囲はおよそ東西に（7．0）m、南北に6．2mの楕円形を呈し、盛土中には土器片も混じっていた。

［位　　置］ N・0－25・26グリッドに位置する。
［重　　複］ 第１号配石遺構と重複。
［規　　模］ 長軸（7．0）m、短軸6．2mの楕円形である。
［堆積土］褐色の土（盛土）が基本層序のⅡ層とⅣ層の間に構築されている。
［出土遺物］覆土から、縄文時代前期末から中期末までの土器片が出土した。

4．配石遺構　　調査の結果、配石遺構が６基検出された。

第１号配石遺構（第11図）
［位　　置］ N・0－24・25グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に確認した。
［範　　囲］ 13個の自然石が半円状に配置されている。
［施　　設］ １号盛土状遺構を確認。配石は第Ⅲ層に構築され、盛土状遺構も同じく第Ⅲ層の所に構築されている。

第２号配石遺構（第11図）
［位　　置］ M－30・31グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に確認した。
［範　　囲］ 14個の自然石が直線上に配置されている。
［施　　設］ 配石の南側に6号小ピット群の2個の小ピットあり。

第３号配石遺構（第11図）
［位　　置］ I－30グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に確認した。

［範　　囲］　10個の自然石が直線上に配置されている。
［施　　設］　配石遺構の下部から、開口部が不整楕円形の土壙（16土）を確認した。規模は、開口部が長軸222㎝・短軸85㎝、壙底部が長軸210㎝・短軸50㎝、深さは42㎝である。また、遺構保存のために未精査だが、開口部の長軸150㎝・短軸60㎝（推定）の楕円形の土壙（17土）も確認した。

第4号配石遺構（第11図）
［位　　置］　Ｉ－30・31グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に確認した。
［範　　囲］　8個の自然石が直線上に配置されている。
［施　　設］　確認できなかった。

第5号配石遺構（第11図）
［位　　置］　Ｈ－30グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に確認した。
［範　　囲］　11個の自然石が直線上に配置されている。
［施　　設］　確認できなかった。

第6号配石遺構（第11図）
［位　　置］　Ｈ－26グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に確認した。
［範　　囲］　5個の自然石が直線上に配置されている。
［施　　設］　確認できなかった。

5．小ピット群　調査の結果、小ピット群が6か所検出された。

第1号小ピット群（第12図）
［位　　置］　Ｍ・Ｎ・Ｏ－28～31グリッドに位置する。
［平面形・規模］　ピットは、南北1630㎝・東西600㎝の範囲に15個位置している。ピットは円形ないし楕円形を呈し、深さは、9～60㎝である。
［出　土　遺　物］なし。

第2号小ピット群（第12図）
［位　　置］　Ｋ－36グリッドに位置する。
［平面形・規模］　ピットは、東西330㎝の範囲に4個位置している。ピットはほぼ円形を呈し、深さは、10～23㎝である。
［出　土　遺　物］なし。

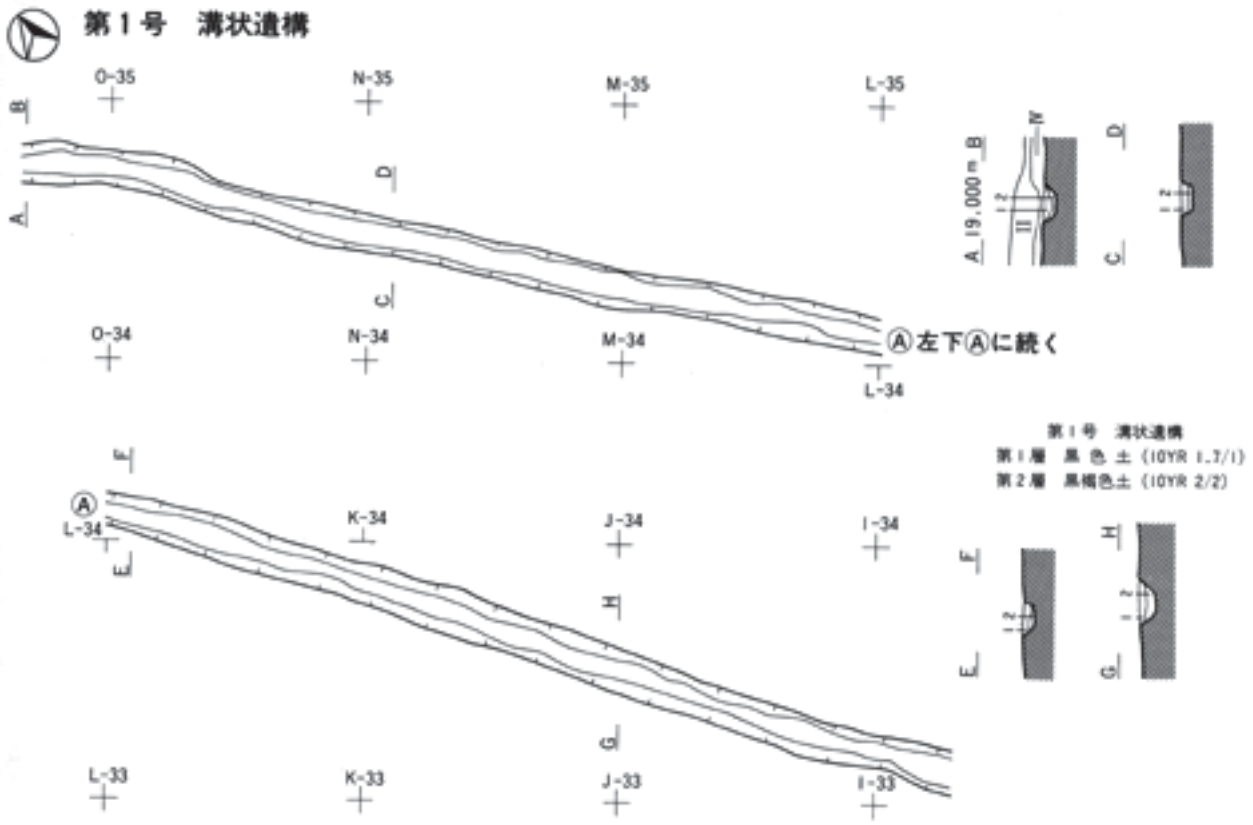
第3号小ピット群（第12図）
［位　　置］　Ｉ－34～36グリッドに位置する。

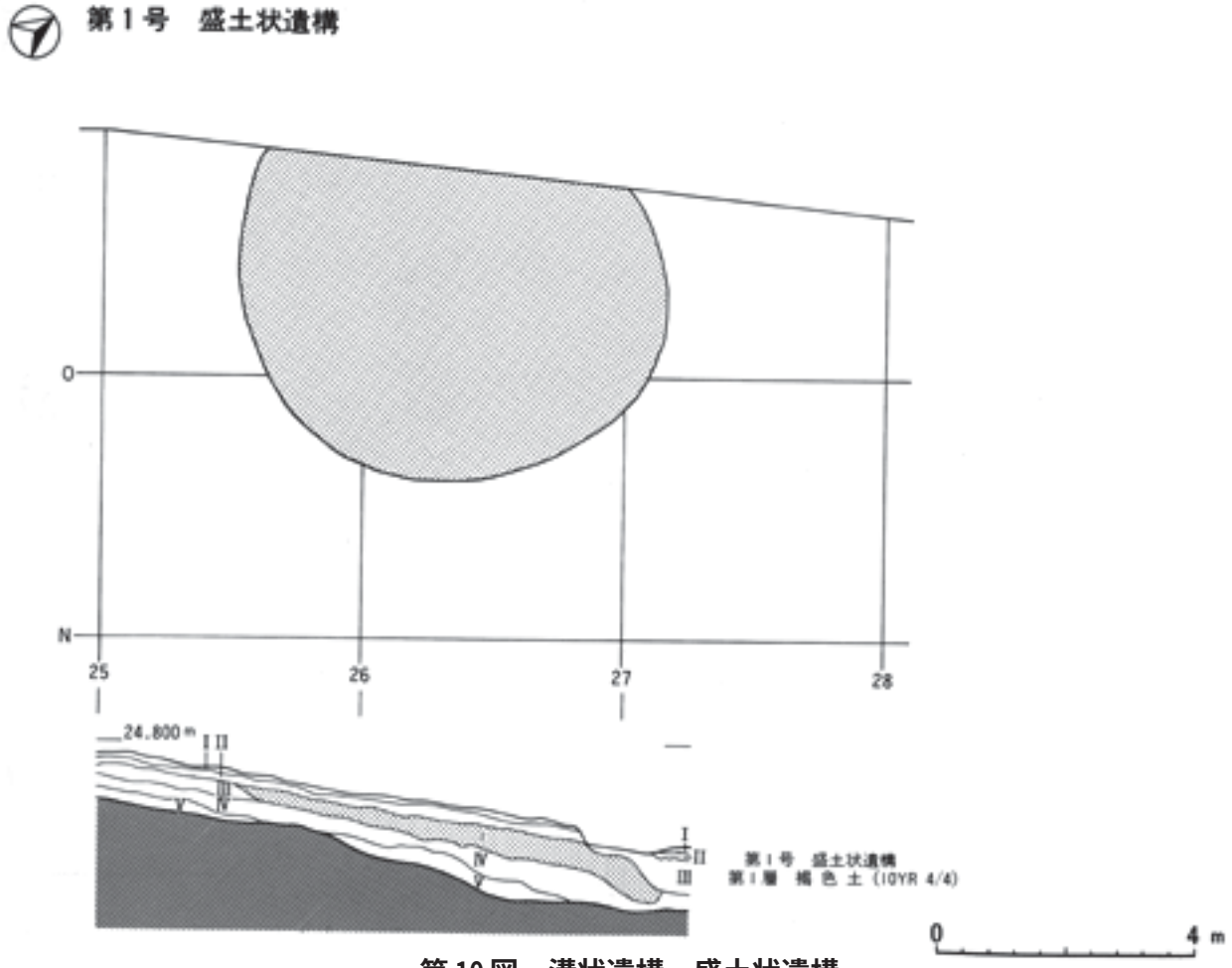
［平面形・規模］　ピットは、北東に1130㎝・北西に240㎝の範囲に12個位置している。ピットは円形・楕円形ないし方形を呈し、深さは7～49㎝である。
［出　土　遺　物］なし。

第4号小ピット群（第12図）
［位　　置］L・M－29グリッドに位置する。
［平面形・規模］　ピットは北西に380㎝の範囲に5個ほぼ一列に位置している。ピットは円形・楕円形ないし方形を呈し、深さは10～55㎝である。
［出　土　遺　物］なし。

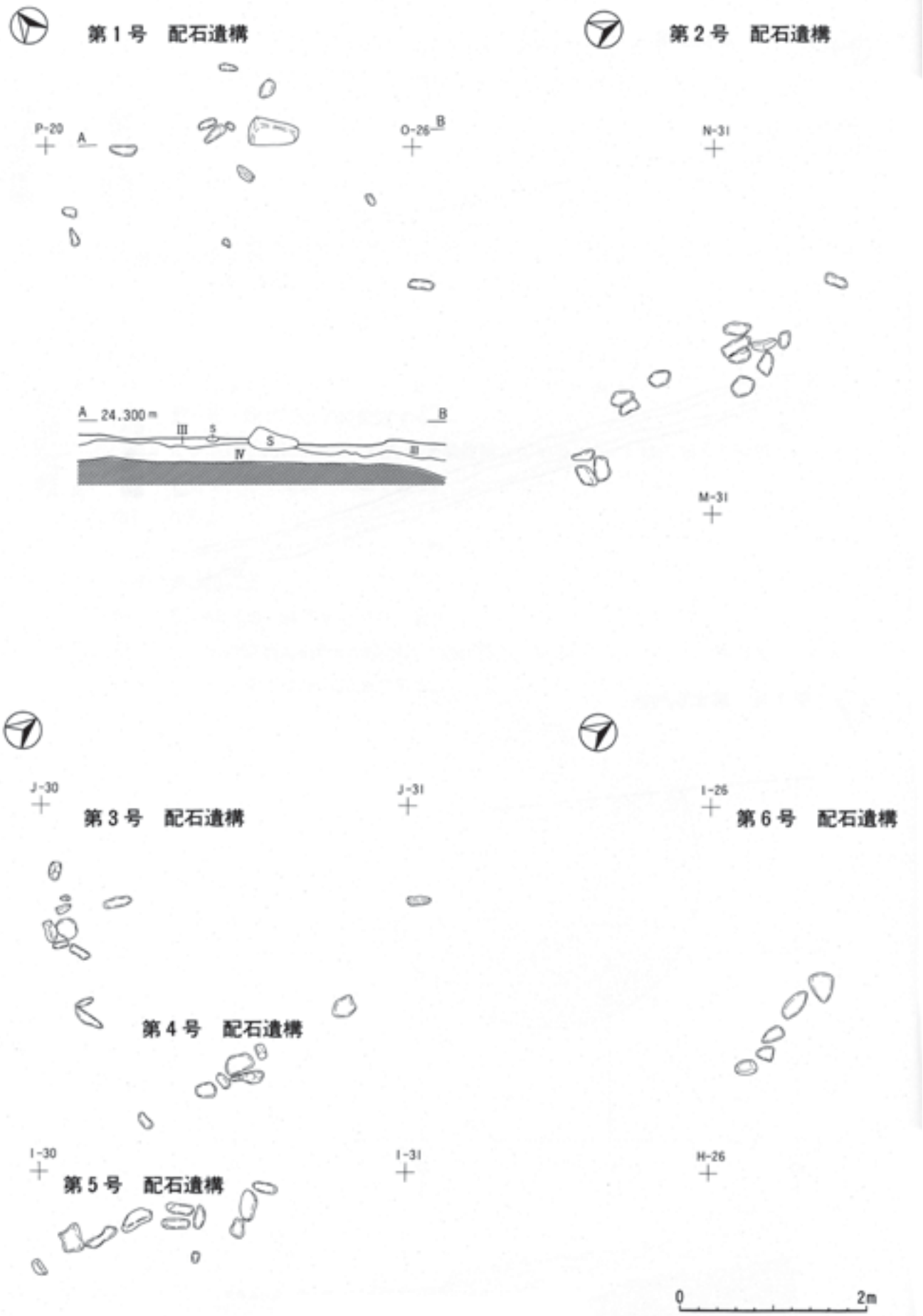
第5号小ピット群（第12図）
［位　　置］J・K－29グリッドに位置する。
［平面形・規模］　ピットは北西に320㎝の範囲に3個位置している。ピットは円形・楕円形ないし方形を呈し、深さは20～48㎝である。
［出　土　遺　物］なし。

第6号小ピット群（第12図）
［位　　置］　L・M－30・31グリッドに位置する。
［平面形・規模］　ピットは東西に610㎝の範囲に3個位置している。ピットは円形・楕円形ないし方形を呈し、深さは16～20㎝である。
［出　土　遺　物］なし。





第10図　溝状遺構・盛土状遺構



第11図　配石遺構（第１～６号）

第12図　小ピット群（第１～６号）

第2節　出土遺物

1．土　　器

今回の調査で出土した土器は、ダンボール箱で約8箱分に相当する量であった。縄文時代前期末から後期初頭までの土器が出土した。調査範囲の大半は、コンクリート舗装で道路として使われていたことから遺物包含層は削平されたものと思われ、遺物の量は少なかった。ただし、削平の深さはそれほど深くはなかったため、遺構は確認できた。

本報告書では、青森県埋蔵文化財調査センターが作成した『青森県内の土器編年表』（青森県：1990）
を参考として分類した。

縄文時代前期

円筒下層ｄ式に比定するもの（第13図）

①口頸部の文様は、撚糸を横位・垂直に押圧。②口縁に粘土紐貼付。③胴部の文様は、木目状撚糸文。

縄文時代中期

円筒上層ａ式に比定するもの（第13図）

①口頸部の文様は、隆線の間に撚糸を横位・縦位・波状・鋸歯状に押圧。③胴部の文様は、羽状縄文。

円筒上層ｃ式に比定するもの（第13図）

①口縁に粘土紐貼付。②口頭部の文様は、隆線の間に刺突。

円筒上層ｄ式に比定するもの（第13図）

①口縁に粘土紐貼付。②口縁にボタン状突起。

円筒上層ｅ式に比定するもの（第14図）

①口縁に横位・縦位の沈線。②胴部の文様は、羽状縄文。

榎林式に比定するもの（第14図）

①口縁部が肥大化し、波頂部に渦巻文様を施文。②幅の狭い無文帯で波状口縁をなし、その下位部に斜行縄文を施文。

最花式に比定するもの（第14図）

①口頸部が若干外に開く形状の平口縁。②折り返し口縁には縄文（LR）を施文。

中期末葉で時期の特定できないもの（第14図）

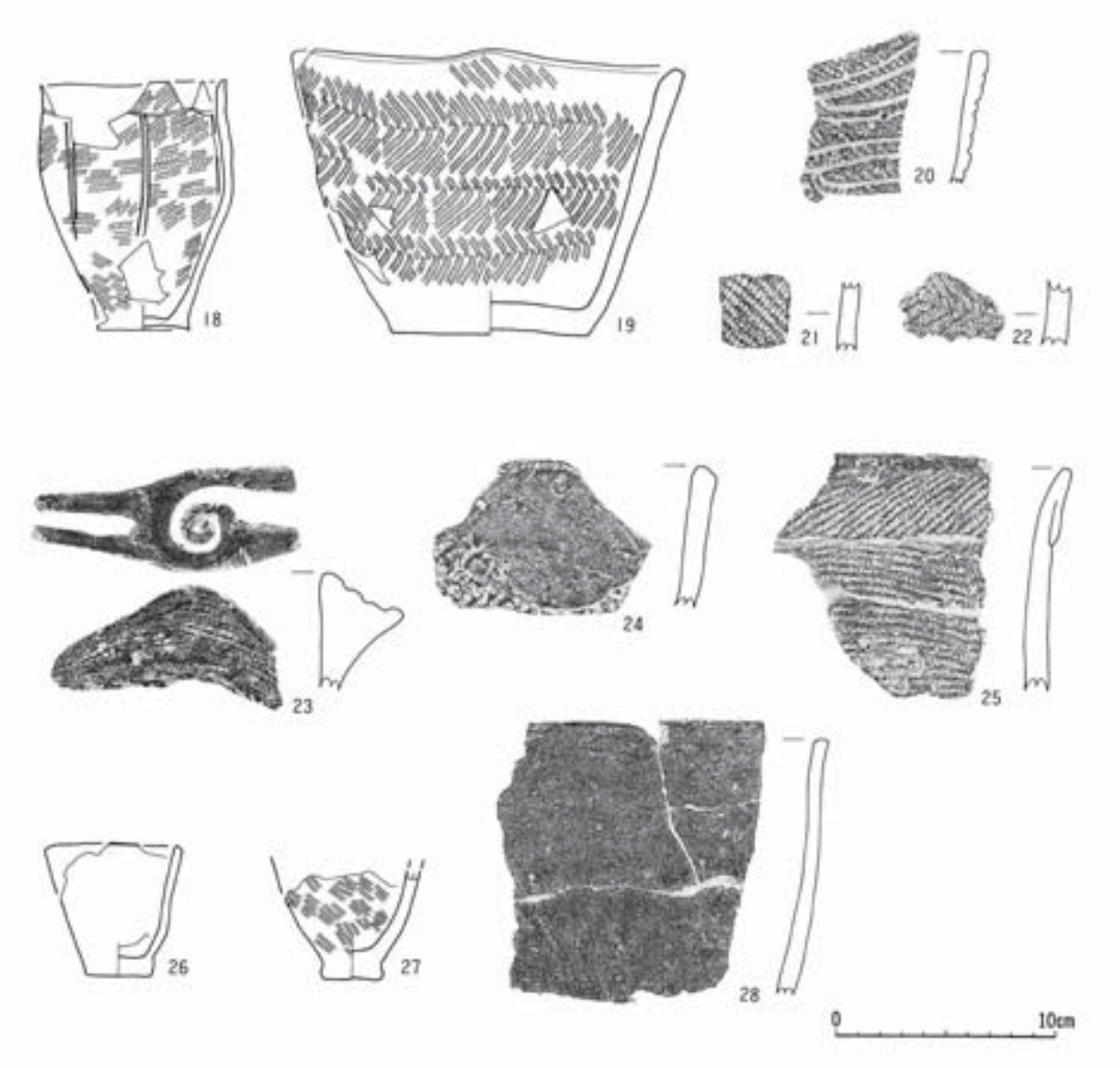
①無文の小型鉢形土器。

縄文時代後期

十腰内Ⅰ式に比定するもの（第14図）

①平口縁で無文。

第 13 図　出土遺跡（土器）



第 14 図　出土遺物（土器）

土器観察表

番　号	出土地点	層位	器種・部位	外　面　の　文　様	内面調整	分類
第13図－1	1盛土	覆1	深鉢　胴部	木目状撚糸文	研磨	下d
第〃図－2	〃	〃	〃　口頸	平口縁、斜位の隆線の上面に縄文	〃	〃
第〃図－3	4土	〃	〃　胴部	縄文（RL）	〃	〃
第〃図－4	20土	〃	〃　〃	綾絡文、縄文（RL・LR）	〃	〃
第〃図－5	N－26	Ⅲ	〃　口頸	波状口縁、縦位の隆線の上面に縄文	〃	〃
第〃図－6	M－37	Ⅱ	〃　〃	平口縁、撚糸押圧（水平）、縦位の隆線の上面に縄文	〃	〃
第〃図－7	O－37	Ⅳ	〃　〃	〃　、縦位の隆線の上面に縄文	〃	〃
第〃図－8	19土	覆1	〃　〃	波状口縁、隆線の上面に縄文	〃	上a
第〃図－9	O－28	Ⅳ	〃　〃	〃　、縦位・斜位の隆線の上面に縄文	〃	〃
第〃図－10	I－34	Ⅱ	〃　〃	平口縁、横位の隆線の上面に爪形圧痕	〃	〃
第〃図－11	N－37	〃	〃　〃	波状口縁、横位・斜位の隆線の上面に縄文	〃	〃
第〃図－12	M－36	〃	〃　〃	〃　、横位の隆線間にく字状圧痕、羽状縄文	〃	〃
第〃図－13	M－37	Ⅳ	〃　〃	〃　、縦位・横位・弧状の隆線間に刺突、貫通孔		上c
第〃図－14	10土	覆1	〃　胴部	横位の隆線		上d
第〃図－15	I－35	Ⅱ	〃　口頸	平口縁、口唇部寄りに斜位の隆線		〃
第〃図－16	M－37	〃	〃　〃	〃　、口唇部寄りに波状文・下位に横位斜位の隆線		〃
第〃図－17	O－34	Ⅲ	〃　〃	〃　、ボタン状突起、口唇部寄りに波状隆線		〃
第14図－18	N－36	Ⅱ	小形鉢　完形	〃　、縦位・横位（沈線）		上e
第〃図－19	N－37	〃	鉢　〃	〃　、羽状縄文		〃
第〃図－20	N－38	〃	小形鉢　口頸	波状口縁、沈線		〃
第〃図－21	1溝	覆1	深鉢　胴部	縄文（RL）		〃
第〃図－22	3土	〃	〃　〃	羽状縄文		〃
第〃図－23	N－26	Ⅲ	〃　口頸	波状口縁、口唇部肥大、突起頂に渦巻状沈線		榎林
第〃図－24	N－37	Ⅱ	〃　〃	〃		〃
第〃図－25	I－25	〃	〃　〃	折り返し口縁、縄文（LR）		最花
第〃図－26	O－37	Ⅲ	小型埋土器　完形	平口縁、無文		中末
第〃図－27	〃	Ⅱ	〃　底部	縄文（LR）		〃
第〃図－28	O－29	〃	深鉢　口頸	無文		十腰内Ⅰ

2．石　　器

今回の調査で出土した石器は、ダンボール箱で約4箱分に相当する量で、すべて遺構外からの出土であった。縄文時代前期末から後期初頭にかけての土器が出土したが、その主体となる時期は縄文時代前期末から中期末であり、石器はその時期に帰属するものと考えられる。

敲磨器類には、凹石、磨石、敲石を含むものとする。

石鏃は2点（第15図－1・2）出土した。凸基有茎鏃が1点であり、基部にえぐりの入ったのが1点である。石質は2点とも珪質頁岩である。

石匙は2点（第15図－3・4）出土した。ともに縦型である。全体にていねいな調整を施している。石質は2点とも珪質頁岩である。

石錐は1点（第15図－5）出土した。剥離を利用し作り出している。石質は珪質頁岩である。

スクレイパー類は6点（第15図－6～9、第15図－10・11）出土した。いわゆる不定形石器であり、刃部の調整も様々である。石質は6点とも珪質頁岩である。

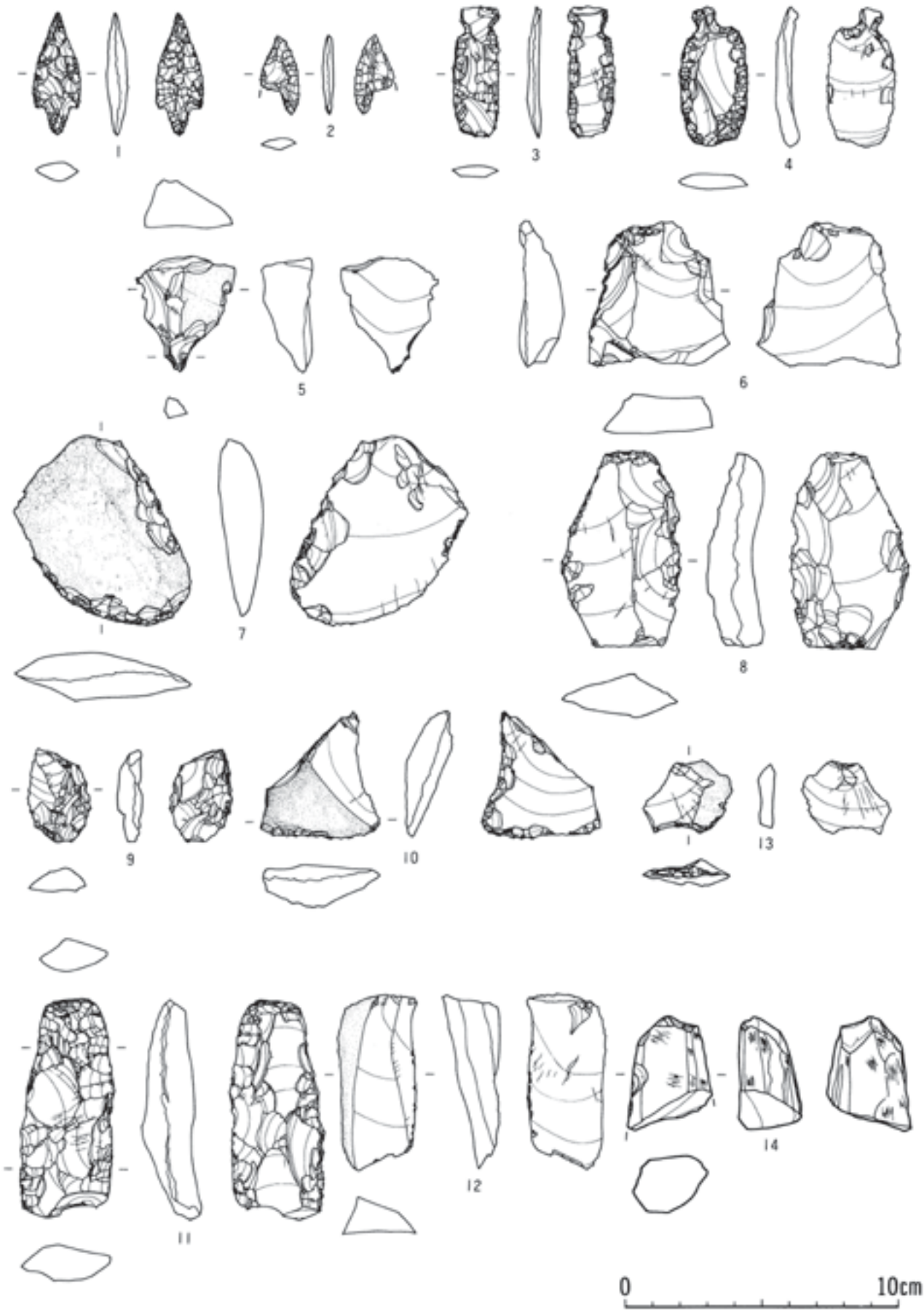
フレイク類は2点（第15図－12・13）出土した。黒曜石のフレイクが1点（13）出土している。石質は珪質頁岩が1点、黒曜石が1点である。

磨製石斧は5点（第15図－14、第16図－15～18）出土した。うち4点が分銅型を呈し、刃部がすぼまっているものが1点（15）ある。石質は輝緑凝灰岩が4点、閃緑岩が1点である。

敲磨器類は、すりによるもの3点（第16図－19・20・21）、凹によるもの2点（第16図－22・23）、敲打によるもの1点（第16図－24）の計6点が出土した。表裏または複数の面に1ないし3個づつの凹を有する。石質は流紋岩が1点、安山岩が1点、石英安山岩が4点である。

3．土　製　品

土製品は土偶が2点（第16図一25・26）遺構外から出土した。（25）は、扁平で脚部を具体的に表現していない板状土偶である。へそは貼り付けと思われるが、剥落している。（26）は、大形の板状土偶の左頭部片と思われる。撚糸をまゆ上部・側頭部・裏面に圧痕している。裏面の圧痕は3条単位で施される。頭頂部から裏面にかけて貫通孔がある。



第 15 図　出土遺物（石器）

第16図　出土遺物（石器・土製品）

石器観察表

図版番号	出土地点	層位	最大計測値				石　質	分　類	備　　考
			長（m）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）			
第15図－1	N－23	V	45．5	17．5	8．0	40．0	珪質頁岩	石鏃	
第〃図－2	I－35	II	19．0	13．5	4．0	0．8	〃	〃	
第〃図－3	N－24	〃	48．0	17．0	5．0	4．1	〃	石匙	
第〃図－4	I－23	〃	51．5	25．0	9．0	6．5	〃	〃	
第〃図－5	O－29	IV	42．0	36．0	18．5	19．9	〃	石錐	
第〃図－6	I－35	II	53．0	51．5	16．5	40．9	〃	スクレイパー	
第〃図－7	O－28	III	69．5	65．0	18．0	61．9	〃	〃	
第〃図－8	N－36	II	72．0	43．0	17．0	58．1	〃	〃	
第〃図－9	M－33	IV	35．0	24．0	9．0	6．4	〃	〃	
第〃図－10	M－34	II	46．0	43．0	15．0	19．4	〃	〃	
第〃図－11	O－27	III	80．5	34．5	22．0	50．9	〃	〃	
第〃図－12	N－35	II	64．0	26．0	20．0	29．9	〃	Uフレイク	
第〃図－13	L－35	〃	32．5	26．5	10．0	5．2	黒曜石	フレイク	
第〃図－14	〃	〃	(41．5)	31．5	22．5	34．0	輝緑凝灰岩	磨斧	
第16図－15	M－36	IV	(30．0)	27．5	11．0	12．0	〃	〃	
第〃図－16	N－37	III	(58．0)	62．5	25．0	90．0	〃	〃	
第〃図－17	N－36	II	91．0	47．5	28．0	192．0	〃	〃	
第〃図－18	M－37	〃	(75．0)	63．0	34．0	254．0	閃緑岩	〃	
第〃図－19	L－33	〃	121．0	71．0	21．0	304．0	流紋岩	敲磨器類	スリ
第〃図－20	M－33	〃	(97．0)	70．0	53．0	483．4	石英安山岩	〃	〃
第〃図－21	N－36	〃	(123．0)	62．0	35．0	470．6	〃	〃	〃
第〃図－22	N－25	〃	(101．0)	60．0	40．0	304．5	安山岩	〃	凹み
第〃図－23	O－34	〃	(80．0)	55．0	43．0	289．0	石英安山岩	〃	〃
第〃図－24	I－35	〃	(100．0)	59．0	44．0	371．1	〃	〃	敲き

土製品観察表

図版番号	出土地点	層位	計　測　値				分　類	備　　考
			長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）		
第16図－25	O－28	II	(35．0)	37．0	11．0	17．0	土偶	脚部
第〃図－26	M－36	〃	(80．0)	(78．0)	40．0	214．2	〃	頭部

第III章　分析と考察

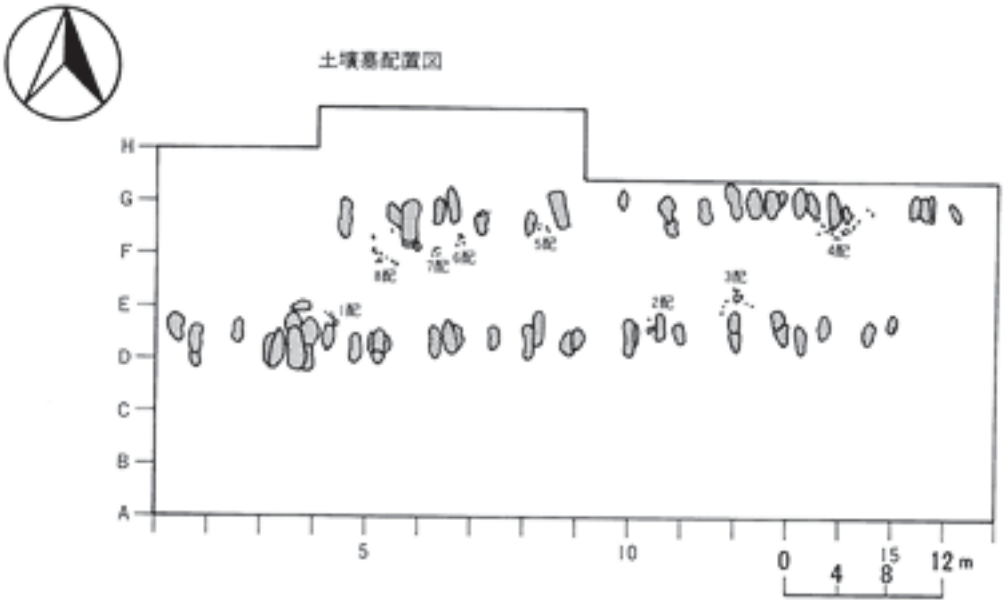
土壙墓

本遺跡の土壙墓が検出された地点から東側に直線にして約80m行った所（三内丸山（2）遺跡地内）に、県総合運動公園の西駐車場がある。この西駐車場は、県教委が発掘調査（昭和51年4月21日から同年7月31日まで）を実施した。その際検出された土壙57基のうち1基は、攪乱の可能性があり、残りの56基の土壙は、堆積土・形態などを考え合わせると土壙墓（第17図）と判断されている。そしてまたその土壙墓群は配列に特徴があり、4～5mの間隔で並列的に位置している。南側は東西に幅52m以内に33基、北側は東西に幅35m以内に23基の土壙墓が整然と配置されている。土壙の長軸方位は南北を指す土壙が多い。底面の傾斜はどちらも向かい合う内側が低く、外側が高くなっている。このことから埋葬時に底面のレベルの高い方に頭部を置き埋葬すると、南側土壙配列の埋葬体と北側土壙配列の埋葬体が向かい合うのである。また、配石遺構も南側土壙配列に3基、北側土壙配列に5基検出された。石は河原石を用いている。これらの配石は土壙を囲んだり、近接して検出されることから墓標として考えられるのではないかと報告されている。土壙墓の時期については、縄文時代中期後半の榎林式期のものと考えられている。

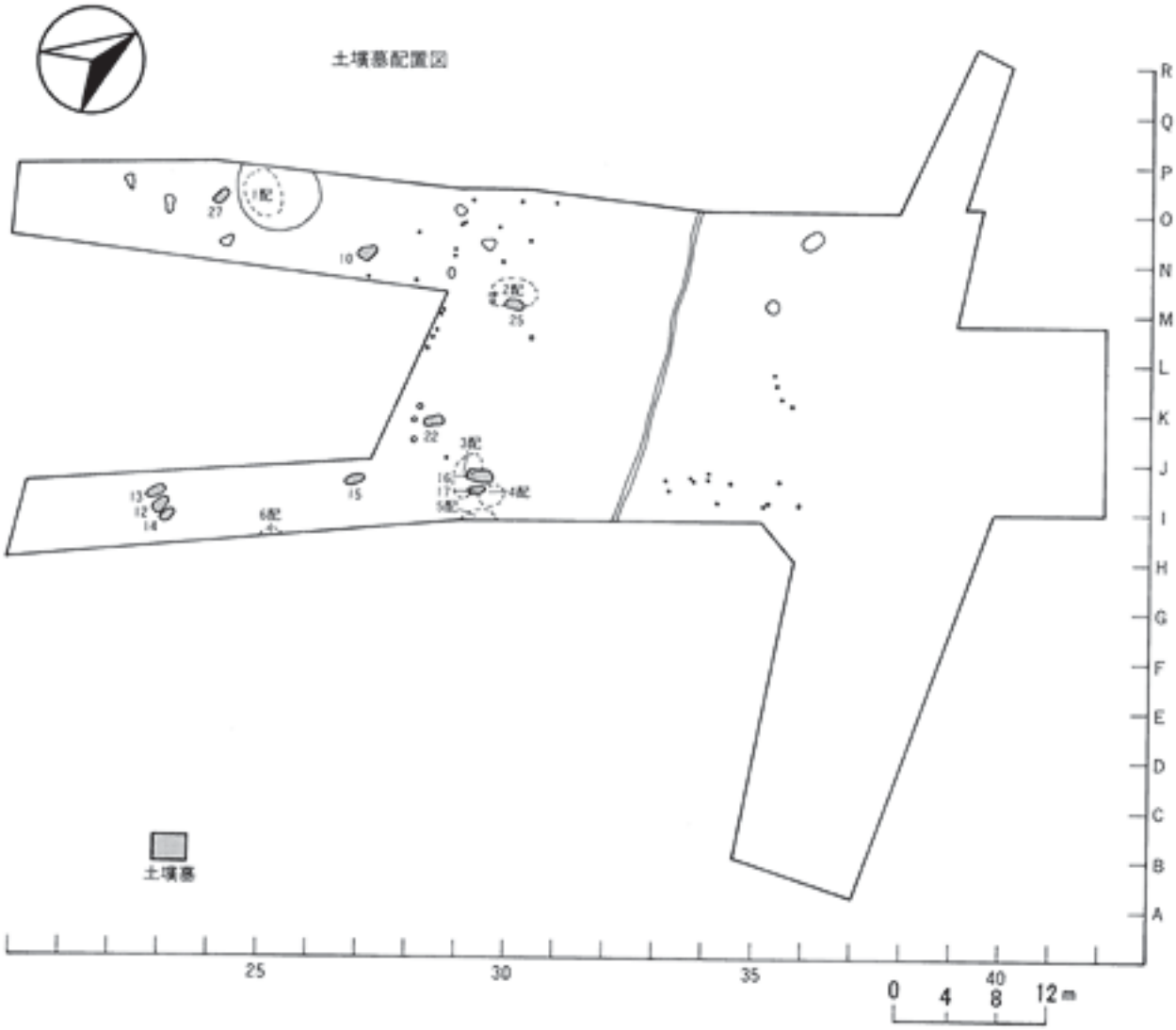
また、同じく本遺跡C区の土壙墓が検出された地点から北側に直線にして約200m行った所（三内丸山（2）遺跡地内）で、平成4年度から県総合運動公園野球場建設のために県が発掘調査を実施した結果、縄文時代前期から平安時代までの複合遺跡であることが確認された。特に縄文時代の集落跡は全国でも有数の規模で、集落の全体像が具体的に理解できる貴重な資料がたくさん出土した。そこで県では、遺跡の保存を決定し遺構の復元などに努めている。平成7年度までの調査で土壙墓は、沖館川に面した谷の東側の平坦面に約150基作られており、調査を進めていくとまだまだ増えるものと思われる。平面形は小判形や隅丸長方形で、規模は長さが1．0～2．0m、幅が0．6～1．0m、深さは0．5～1．0m位の大きさである。また、土壙の上部に礫を配置した土壙墓や底面に壁溝が巡るものも見られる。これらの土壙墓は配置に特徴があり、主軸が並列状に配置される所とそれと直交する所がある。土壙墓の時期については、縄文時代前期末葉から中期前半のものと考えられている。

本遺跡で検出された土壙19基のうち、10基が土壙墓（第17図）と判断される。また、配石遺構も6基検出した。前述の土壙墓と比較してみると、配列でいうと、2または3基が並んでいるだけで、あとは点在していた。土壙の長軸方位は、北～北東を指している。形は、楕円形や隅丸長方形が多く、底面に溝があるのを2基検出した。また、2基隣り合っている土壙墓の上面に配石遺構があり、その石の組み方に（丨〓、1個縦に置きそれに対して横に2個置く）特徴があり、上記の西駐車場で検出された配石遺構の石の組み方と似ていた。土壙墓の時期については、土壙内からの出土遺物が非常に少なかったため、遺構外から出土している遺物の年代でいうと、縄文時代前期末葉から中期後半までの間ではないかと思われる。

本遺跡で検出された10基の土壙墓は、標高25～20mと北東側に傾斜していく斜面に位置しており、前述の2つの地点で検出された土壙墓と比べ、かなり高い斜面上に造られている。全体的な配列は規則的とまではいえないにしても、斜面上に近接して集まっていると思われる。同じ三内丸山（2）遺跡の中であり、多少時期が違ってはいるものの、構築方法・埋葬の仕方等似ているものがあると思われる。



（「近野遺跡（田）・三内丸山（日）遺跡発掘調査報告書」青埴文報告書 第33集より転載）



第 17 図　土壙墓配置図

ま　と　め

三内丸山（2）遺跡Ｃ区の発掘調査で検出・出土した遺構と遺物は、次のとおりである。

・遺構

土　壙……19基（うち土壙墓……10基）

溝状遺構……1本

盛土状遺構……1基

配石遺構……6基

小ピット群……6か所

・遺物

土器は縄文時代前期末から後期初頭まで出土しているが、そのほとんどは、前期下層ｄ式と中期上層のａ・ｄ・ｅ式である。

石器は、石鏃・石匙・石錐・スクレイパー・磨製石斧・敲磨器類が出土した。

土製品は、土偶が2点出土した。

最後になりますが、調査並びに本報告書刊行に至るまでご指導ご協力ご援助を賜った多くの方々に改めて感謝の意を表し、まとめとさせていただきます。　（長沼　圭一）

参考文献

1	青森県教育委員会	1974	『近野遺跡（1）発掘調査報告書』	青埋文報告書第　12集
2	青森県教育委員会	1975	『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』	青埋文報告書第　22集
3	青森県教育委員会	1975	『中の平遺跡発掘調査報告書』	青埋文報告書第　25集
4	青森県教育委員会	1976	『泉山遺跡発掘調査報告書』	青埋文報告書第　31集
5	青森県教育委員会	1977	『近野遺跡(Ⅲ)・三内丸山(Ⅱ）遺跡発掘調査報告書』	青埋文報告書第　33集
6	青森県教育委員会	1978	『三内遺跡発掘調査報告書』	青埋文報告書第　37集
7	青森県教育委員会	1978	『三内沢部遺跡発掘調査報告書』	青埋文報告書第　41集
8	青森県教育委員会	1979	『近野遺跡発掘調査報告書（Ⅳ)』	青埋文報告書第　47集
9	青森県教育委員会	1989	『富ノ沢（1)・(2）遺跡発掘調査報告書』	青埋文報告書第118集
10	青森県教育委員会	1989	『館野遺跡発掘調査報告書』	青埋文報告書第119集
11	青森県教育委員会	1991	『富ノ沢（1)・(2）遺跡発掘調査報告書』	青埋文報告書第133集
12	青森県教育委員会	1991	『中野平遺跡発掘調査報告書』	青埋文報告書第134集
13	青森県教育委員会	1991	『富ノ沢（2）遺跡Ⅳ発掘調査報告書』	青埋文報告書第137集
14	青森県教育委員会	1992	『富ノ沢（2）遺跡Ⅴ発掘調査報告書』	青埋文報告書第143集
15	青森県教育委員会	1993	『富ノ沢（2）遺跡Ⅵ発掘調査報告書』	青埋文報告書第147集
16	青森県教育委員会	1995	『三内丸山（2）遺跡Ⅱ発掘調査報告書』	青埋文報告書第157集
17	青森県教育委員会	1995	『三内丸山（2）遺跡Ⅲ発掘調査概報』	青埋文報告書第166集
18	青森県教育委員会	1962	三内霊園遺跡調査概報	青森市の文化財1
19	青森県教育委員会	1970	三内丸山遺跡調査概報	青森市の埋蔵文化財4
20	青森県教育委員会	1988	三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書	青森市の埋蔵文化財
21	青森県教育委員会	1993	三内丸山（2）遺跡発掘調査概報	青森市埋蔵文化財調査報告書第18集
22	青森県教育委員会	1994	小三内遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書第22集
23	青森県教育委員会	1994	三内丸山（2）・小三内遺跡発掘調査報告書	青森市埋蔵文化財調査報告書第23集
24	村越　潔	1974	『増補円筒土器文化』	
25	三宅徹也	1978	円筒土器の概念とその崩壊	『青森県立郷土館調査研究年報』3
26	三宅徹也	1981	円筒土器	『縄文文化の研究』
27	青森県埋蔵文化財調査センター	1990	大地から甦った祖先の足跡　総括編	図説「ふるさと青森の歴史」
28	青森県埋蔵文化財調査センター	1992	青い森の縄文人とその社会　縄文時代中期・後期編	図説「ふるさと青森の歴史」

写　真　図　版

調査区（北東→南西）

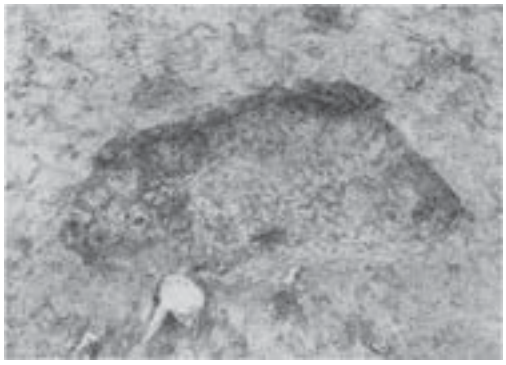
調査区（南西→北東）

調査区（南西→北東）

道路西側ローム確認

コンクリート除去後（北東→南西）

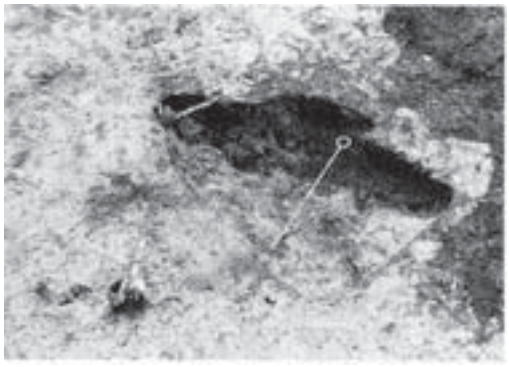
基本層序（P-25 ～ 26）



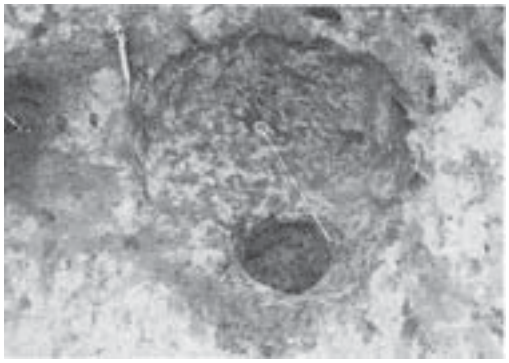
第 3 号土壙　完掘

第 4 号土壙　完掘

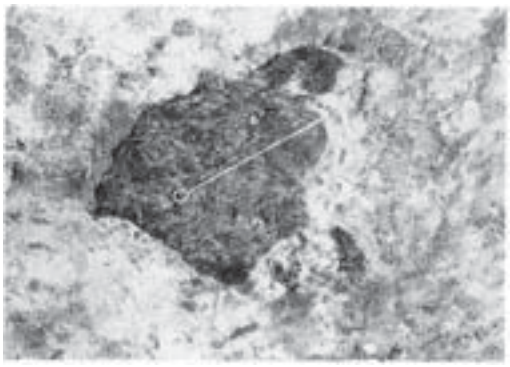
写真 1　（調査区ほか）



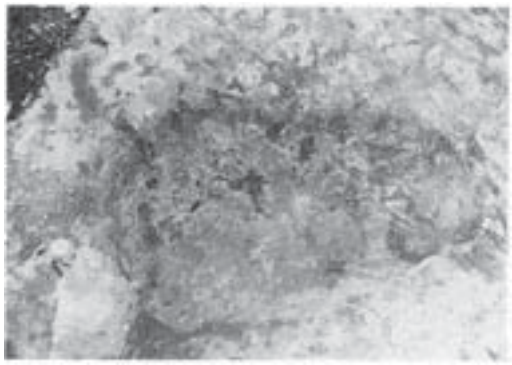
第 5・6 号土壙　完掘



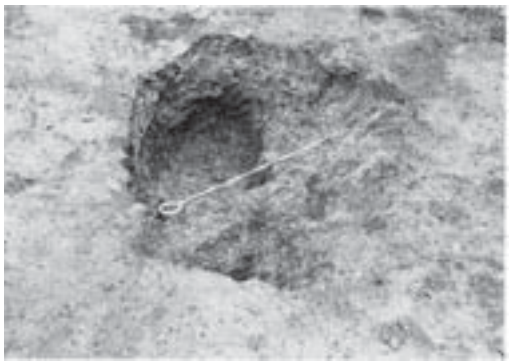
第 8 号土壙　完掘



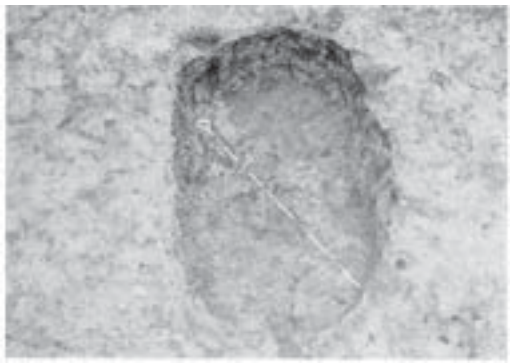
第 9 号土壙　完掘



第 10 号土壙　完掘

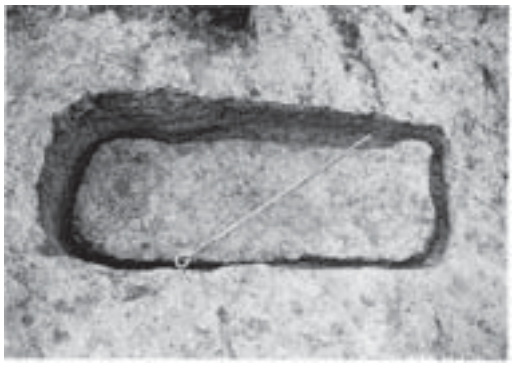


第 11 号土壙　完掘



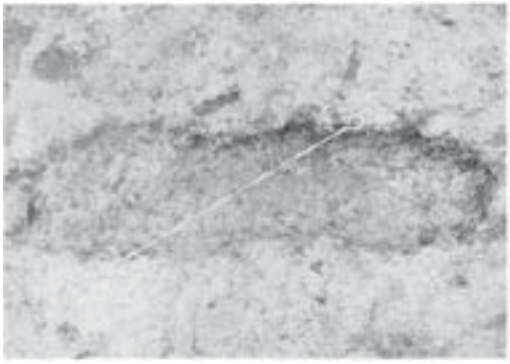
第 12 号土壙　完掘

第 12・13 号土壙　完掘



第 13 号土壙　完掘

写真 2　（土壙）



第 15 号土壙　完掘

第 16 号土壙　完掘

第 19 号土壙　完掘

第 20 号土壙　完掘

第 22 号土壙　完掘・第 5 号小ピット群

第 25 号土壙　完掘・第 2 号配石遺構

第 1 号溝状遺構　完掘

写真 3　（土壙ほか）

第１号盛土状遺構　確認

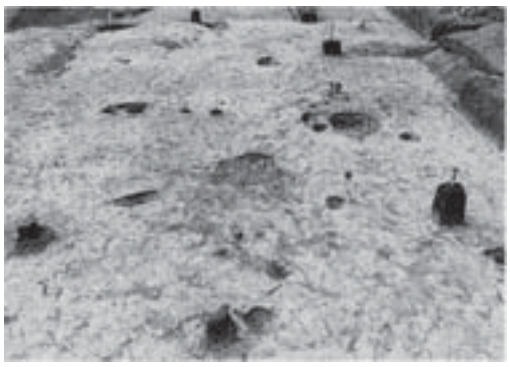
第１号盛土状遺構　盛土堆積状況

第１号配石遺構

第２号配石遺構

第３・４・５号配石遺構

第６号配石遺構



第１号小ピット群

第４号小ピット群

写真４　（配石遺構ほか）

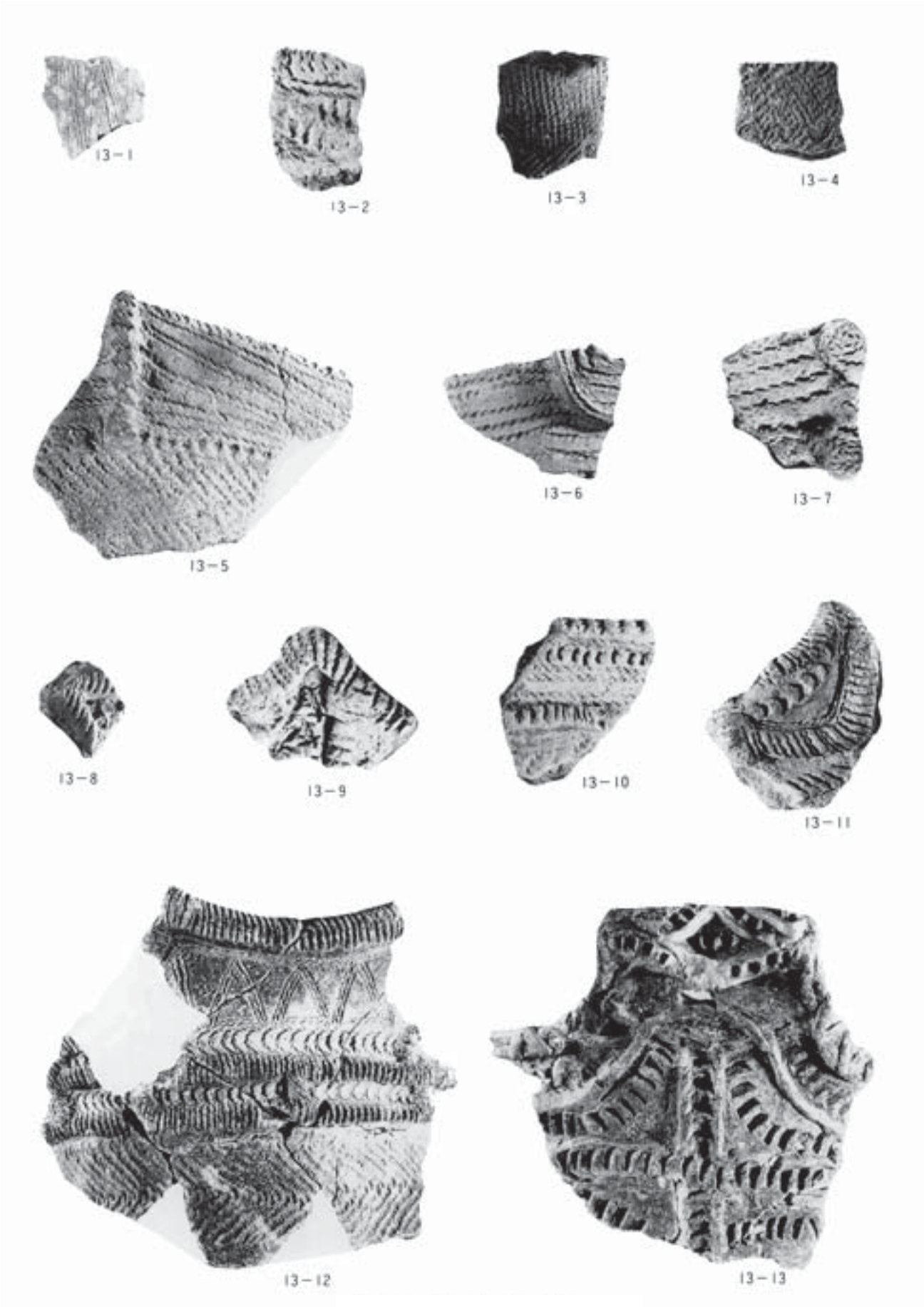
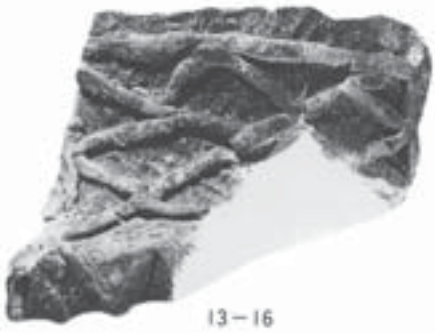


写真５　出土遺物（土器）

13－14

13－15


13－16

13－17

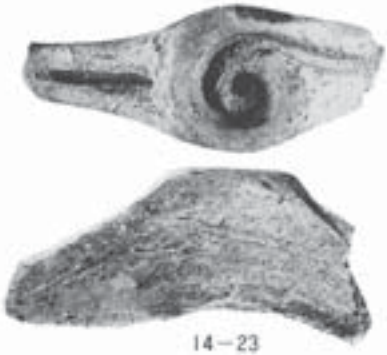
14－18

14－19

14－20

14－21

14－22


14－23

14－24

14－25

14－26

14－27

14－28

写真６　出土遺物（土器）

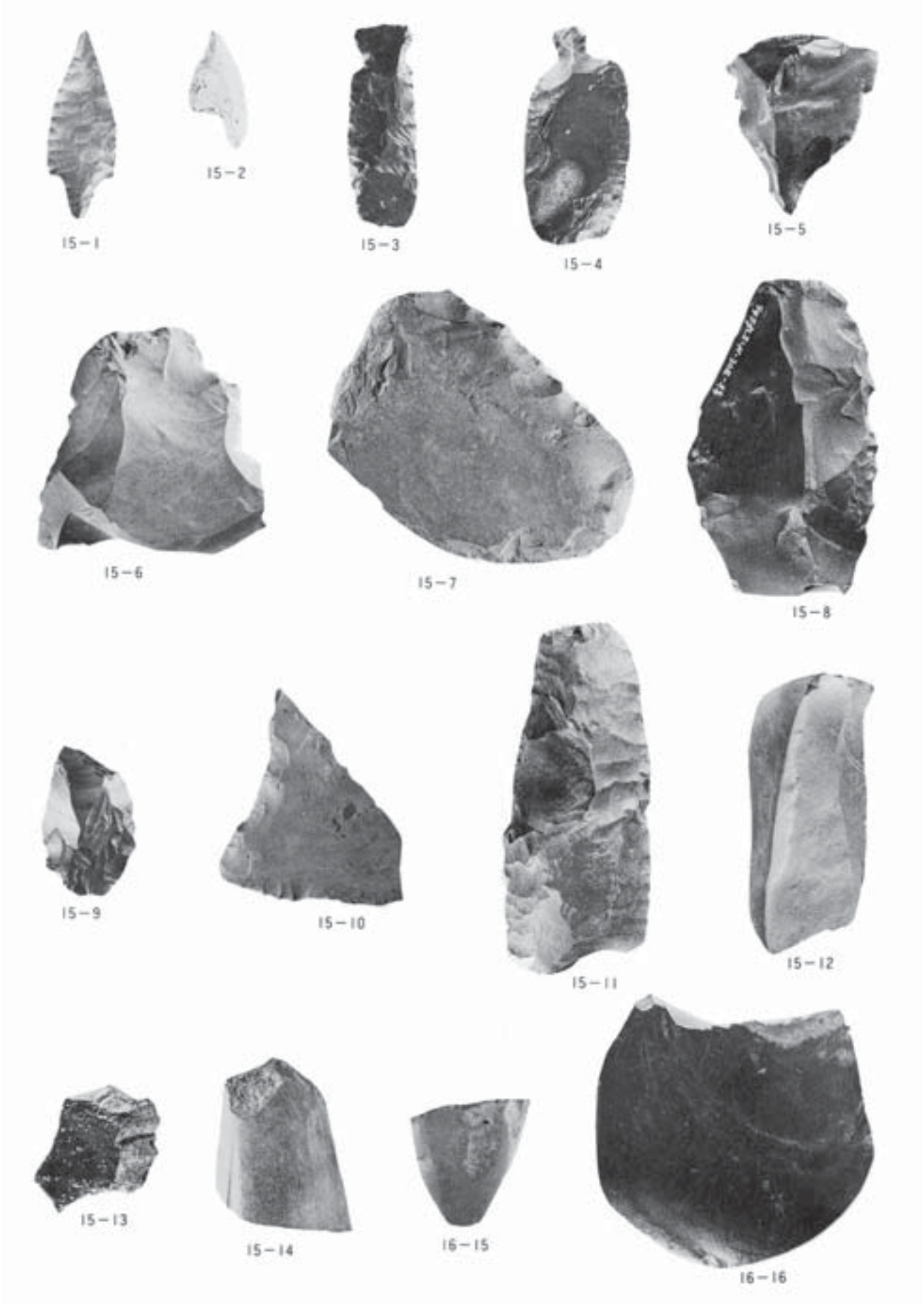

15－1
15－2
15－3
15－4
15－5
15－6
15－7
15－8
15－9
15－10
15－11
15－12
15－13
15－14
16－15
16－16

写真７　出土遺物（石器）

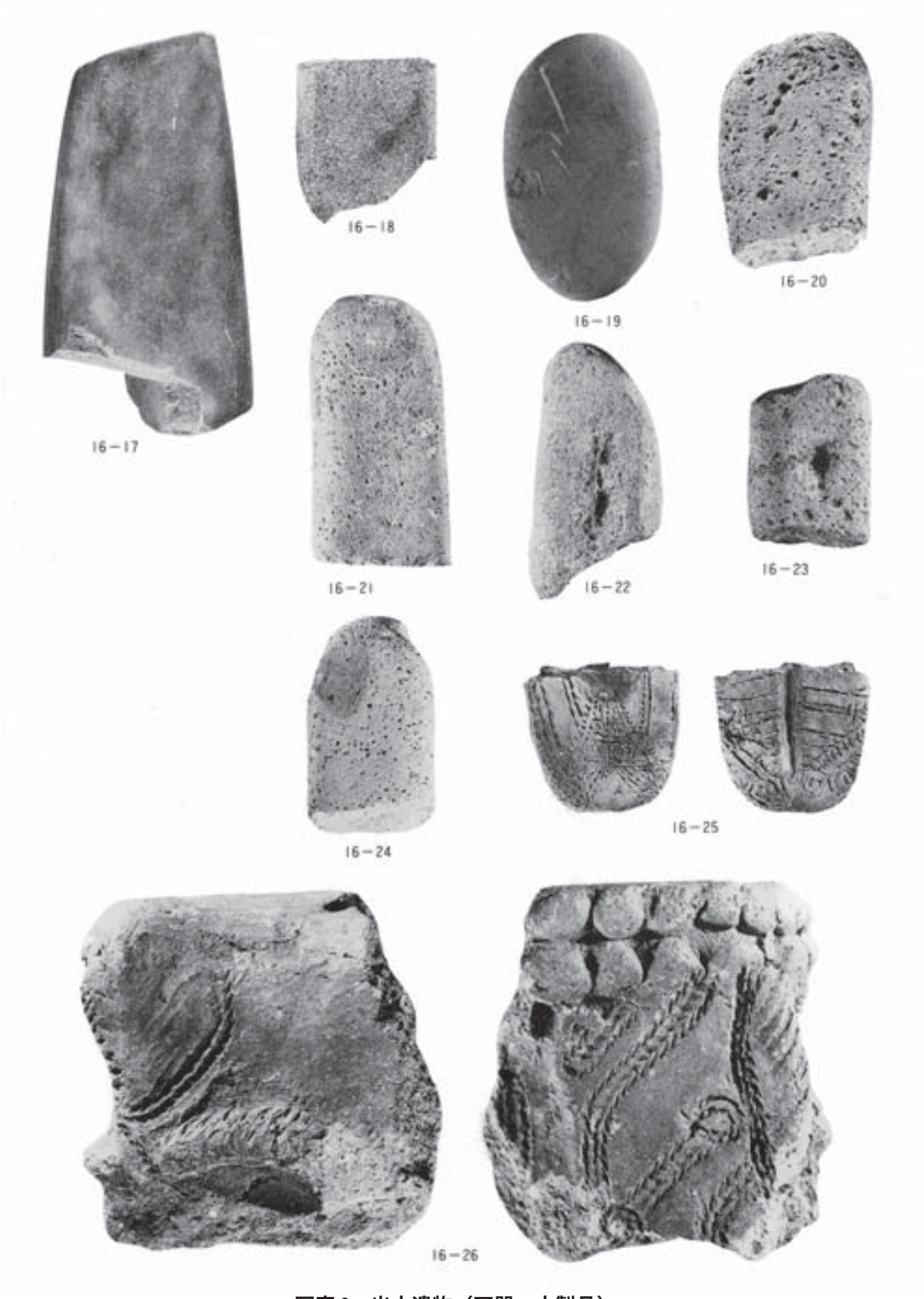


写真８　出土遺物（石器・土製品）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	さん ない まる やま かっこに い せき
書 名	三 内 丸 山 (2) 遺 跡
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	青森市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第28集
編 著 者 名	長 沼 圭 一
編 集 機 関	青森市教育委員会
所 在 地	〒030 青森県青森市中央一丁目22－5 TEL0177－34－1111
発 行 年 月 日	西暦 1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
さんないまるやまかっこに 三内丸山（2）	あおもりけんあおもりし 青森県青森市 おおあざさんないあざまるやま 大字三内字丸山	02201	01021	40° 48′ 24″	140° 42′ 4″	19951011 ～ 19951208	2,200	都市計画街路(3・4・15号里見丸山線)道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主な遺物	特記事項
三内丸山(2)	墓 域	縄文時代	土壙 19基 （うち土壙墓―10基） 溝状遺構 1本 盛土状遺構 1基 配石遺構 6基 小ピット群 6か所	縄文土器 石器	土壙19基のうち土壙墓は10基、そのうち配石を伴うのが3基 土を幾層かに盛った盛土状遺構が1基 遺構に砂を入れ保存を図る

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965『四ッ石遺跡調査概報』
〃	3	1967『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979『螢沢遺跡』
		1983『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983『山野峠遺跡』
〃		1985『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1986『横内城遺跡発掘調査報告書』
〃		1988『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書	第16集	1991『山吹（1）遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993『三内丸山（2）遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1994『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第21集	1994『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第22集	1994『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第23集	1994『三内丸山（2）遺跡・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第24集	1995『横内遺跡・横内（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第25集	1995『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第26集	1995『桜峯（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第27集	1996『桜峯（1）遺跡発掘調査概報』
〃	第28集	1996『三内丸山（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第29集	1996『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第30集	1996『小牧野遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書第28集

三内丸山（2）遺跡発掘調査報告書

発行年月日　平成　8年3月29日
発　　行　青森市教育委員会
〒030 青森市中央一丁目22－5
TEL　0177－34－1111
印　　刷　青森オフセット印刷株式会社
〒030 青森市本町二丁目11－16
TEL　0177－75－1431